東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.44

特集　館のみどころ・イチオシ

３年ぶりに開館した東京都立大学 91 年館（学芸員養成課程展示室）外観

2023.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目　次

【特集】館のみどころ・イチオシ

●武蔵野の外観と、「みち」をテーマにした常設展示室　東村山ふるさと歴史館 …… 2
●府中市郷土の森博物館における野外展示　府中市郷土の森博物館 …… 3
●館のみどころ・オススメ　町田市民文学館ことばらんど …… 4
●町田市立自由民権資料館　「館のみどころ・イチオシ」　町田自由民権資料館 …… 5
●青梅市郷土博物館と関連施設の見どころ　青梅市郷土博物館 …… 6
●意外と知らない！？調布市郷土博物館のイチオシ　調布市郷土博物館 …… 7
●瑞穂町郷土資料館のみどころ ―「バーズアイ瑞穂」―　瑞穂町郷土資料館 …… 8
●ふれあい館の見どころ・ここがイチオシ！　ここでのイチオシテーマは「郷土芸能」
奥多摩水と緑のふれあい館 …… 9
●福生市郷土資料室のコレクションと今後の展望　福生市郷土資料室 …… 10
●武蔵村山市立歴史民俗資料館　開館 40 年が経過して　武蔵村山市立歴史民俗資料館 …… 11
●パレオパラドキシア化石と旧市倉家住宅　五日市郷土館 …… 12
●玉川上水はじまりの地の博物館　羽村市郷土博物館 …… 13
●清瀬市郷土博物館の知られざる一品　清瀬市郷土博物館 …… 14
●立川の原風景を今に伝える絵画　立川市歴史民俗資料館 …… 15
●檜原の歴史と建物　檜原村郷土資料館 …… 16
●日野市郷土資料館　昭和の小学校舎の思い出とともに　日野市郷土資料館 …… 17
●「幕末の有名人」に触れられる場所　日野市立新選組のふるさと歴史館 …… 18
●金井観花詩歌図巻　小金井市文化財センター …… 19
●くにたち郷土文化館周辺散策のすすめ　くにたち郷土文化館 …… 20
●旧日立航空機株式会社変電所について　東大和市立郷土博物館 …… 21
●パルテノン多摩ミュージアムのリニューアル　パルテノン多摩ミュージアム …… 22
●東京農工大学科学博物館内における学生活動の再開　東京農工大学科学博物館 …… 23
●見どころいっぱいの建物　江戸東京たてもの園 …… 24
●地域資料としての「包装紙」　たましん地域文化財団 歴史資料室 …… 25
●展示！体験！庭園！　東京都立埋蔵文化財調査センター …… 26
●多摩六都科学館の「大人向けプラネタリウム」　多摩六都科学館 …… 27
●国立ハンセン病資料館のみどころ・イチオシ　国立ハンセン病資料館 …… 28
●未就学児も楽しめる体験型展示「遊びカガク」
コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館）…… 29
●自由な学び―五感を使った観覧者本位の桑都体験　桑都日本遺産センター 八王子博物館 …… 30
● 91 年館のみどころ・イチオシ　東京都立大学 91 年館 …… 31
●狛江市立古民家園（むいから民家園）の見どころ　狛江市立古民家園 …… 32
●博学連携の新たな試み　武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 …… 33
●学生・教員と協働した展覧会 ―公衆衛生から鉄道・メタバースまで―
帝京大学総合博物館 …… 34
●開館 40 年、ただいま「博物館力」増強中！　国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 …… 35
●日獣大獣医学教育用掛図コレクションのご紹介
日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム …… 36
●小平市鈴木遺跡資料館のみどころ・イチオシ　小平市鈴木遺跡資料館 …… 37
東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿 …… 39

※各館からの報告は、2022 年 12 月下旬に東京都三多摩公立博物館協議会加盟館より原稿を集め、まとめたものです。

武蔵野の外観と、「みち」をテーマにした常設展示室

東村山ふるさと歴史館　松﨑 睦彦

東村山ふるさと歴史館の外観

当館を訪れたときに、表通りからまずスロープを歩きますが、見上げると、天井のアルミパンチング板が直線的ではなく、うねっていることに驚かれるかもしれません。東村山は、「武蔵野」の地域に位置していることから、当館の外観は、その武蔵野のイメージから浮かぶ「雑木林」の意匠を主題としています。スロープの曲線の連続になっている天井は、武蔵野の雑木林の木々のざわめきや木もれ日をイメージしています。

展示設備のメインとなる常設展示室は、「みち」をテーマにしています。武蔵野の中でも東村山の地域は、古代の東山道武蔵路や中世の鎌倉街道が通ったことで、ちょっと違う特徴があります。入口にある「ヒストリーマップ」は解説ビデオと連動して、時代と「みち」を説明します。ヒストリーマップ左手からは、原始から現代へ、時計の針が進んでいくように右回りに構成されています。時を戻してみたい場合は反時計回りでどうぞ。

原始「けものみちをたどって」のコーナーには、令和２年９月30日に国の重要文化財に指定され、各新聞にも大きく報道された下宅部遺跡の出土品があるものと想像してしまうかもしれませんが、こちらは当館ではなく（唯一、縄文時代後期の水場遺構から発掘された巨大な丸木舟未製品は、ロビーにて展示してあります）、当遺跡に近い場所にある「八国山たいけんの里」（東村山市野口町3-48-1）にて収蔵展示しています。当館から徒歩約20分で少し距離がありますが、ご興味のある方にはぜひとも、そうでない方にもお散歩がてらお気軽にお立ち寄りいただきたいところです。

下宅部遺跡丸木舟未製品

八国山たいけんの里

常設展示室内のようす

古代「都からのみち」のコーナーには東山道武蔵路の展示があります。実は当館の敷地の真下をこの古代の道が通っていたものと推定されています。当館はテーマだけでなく、足下に古代のみちを感じられる、みちの上の博物館と言えるかもしれません。また、このコーナーには、東村山の地名の語源になった武士団「村山党」の説明パネルもあります。

中世「いざ鎌倉へのみち」では、トピックス展示として国宝建造物の正福寺地蔵堂、重文の元弘の板碑といった文化財を紹介している他、久米川宿や久米川の合戦等の展示も見どころの一つとなっています。こちらをご覧になって実際に市内の鎌倉街道や正福寺、板碑保存館等へ足を延ばしてみるのもいいかもしれません。

近世「江戸へ向かって」では、農村であり、鷹場であった当時の東村山の様子がわかるように展示が構成されています。見どころは常時配布しているワークシート、「古文書にチャレンジ！」です。この原稿を書いている段階で「その20」まであり、なかなかチャレンジしがいのある内容になっています。我こそは、という方にはぜひ挑戦していただきたいところです。

民俗「雑木林とくらし」では、残念なことに、子どもたちに人気だった、八本（重量60キロ）を持ち上げるコーナーが新型コロナの為に休止しています。コロナ禍が早く終わることを祈るばかりです。

近代「新しいみち・鉄道」では、川越鉄道の久米川仮停車場が1894年に出来て以降、次々と市域に路線と駅が開通・開業していった経緯を解説しています。また、多くの方が犠牲になった悲しい戦争の展示も、未来の平和を願う私たちには見逃せないトピックです。

現代「変わってゆくみちと街」では、市内の航空写真が見どころです。農村地帯であった東村山が、時とともにどんどんと住宅都市へと変貌してゆく様子がわかります。最後のコーナーでは、市内文化財の総合的な紹介もしております。

府中市郷土の森博物館における野外展示

府中市郷土の森博物館　荒 一能

はじめに

府中市郷土の森博物館は、府中の歴史と文化と自然を紹介する総合博物館である。本館の常設展示室では、府中の歴史と文化を象徴する、大國魂神社のくらやみ祭・古代の武蔵国府・近世の甲州街道の宿場町を重点にして歴史をたどると共に、府中の環境で特徴的な多摩川・府中崖線・浅間山を軸に自然を紹介している。加えてプラネタリウムでは、本物の輝きに近い星空を再現し、星空の生解説も行なっている。その本館を核に博物館全体の広さは約 13.7ha とおおよそ東京ドーム 3 個分の敷地をもつ。敷地内には市の花である梅を中心とした様々な草花や水遊びの池などがあり、それらを目的とする来館者は多い。しかし、敷地の各所には府中に関わる様々な野外展示もある。そこで今回はみどころの一つとして、その野外展示について紹介したい。

敷地のすべてが博物館

敷地のなかには、かつて市内各所にあった小学校や町役場、民家などの江戸時代から昭和初期の建築物が移築・復元されている。これらの復元建築物は敷地内が府中の縮図となるように地形を造成したうえで配置されている。そのため、敷地を散策すると府中の特徴的な自然や地形、そこから人の営みによって展開された風景などを知ることができるのである。

本館の正面にはケヤキ並木がある。これは府中を象徴する大國魂神社の参道・馬場大門のケヤキ並木を模している。博物館のケヤキ並木を 50 mほど進むと、旧甲州街道に見立てた道と交差する。その道沿いには、実際に旧甲州街道の周辺に建っていた町役場や商家を移築・復元し、かつての町場らしい状況を再現している。

ケヤキ並木と町場の再現

ケヤキ並木から更に南に進むと崖に突き当たる。この崖は多摩川の旧堤防を利用して造成したものであり、府中崖線（ハケ）に見立てている。ハケの北側は標高の高い台地で、ハケ上（うえ）と呼ばれている。ハケ上はケヤキ並木や町場のほか、畑も広がる地域であった。そうした地域の特色を踏まえ、敷地内に再現したハケ上には、上述の役場や商家のほかにも畑作農家の民家を移築し、養蚕を行なっていた時代設定で復元している。また、ハケ上にはうっそうとした雑木林も広がっていた。そうした林の風景を、里山として親しまれている浅間山に見立てた植栽で再現している。

ハケを降りた府中の南側は低地となり、ハケ下（した）と呼ばれている。ハケ下は水源が近く、複数の用水路が張り巡らされており、水田稲作が多くの地域で行なわれていた。そのため、敷地内に再現したハケ下には、稲作農家の民家を移築・復元している。民家の周囲には防風林を設け、その先へ出ると再現した畑と水田がある。水田前を流れる小川をたどると、かつて用水路にあったような水車小屋がある。このように博物館のハケ下では、昔の府中でみられた稲作農家の屋敷構えや周辺の様子も含めて再現している。

こうした府中の縮図を野外展示で示せるのも、広大な敷地と府中を対象にした地域博物館の特性が合わさったからであろう。

敷地を活用したイベント

このような野外展示は見学のみならず、様々なイベントにも活用されている。その最たるものが、小・中学生を対象にした稲作体験をする“こめっこクラブ”であろう。このイベントは、昔の農具を用いて田起こしから田植え、草取り、そして収穫に至るまでを参加者に経験してもらうものである。それと共に、現在ではみかけることが少なくなった、昔ながらの方法で行なう稲作や季節ごとにうつろう水田の様子を来館者にみてもらう目的もある。

こめっこクラブによる田の草取り

ほかにも、脱穀した後の稲わらを用いるわら細工教室やしめかざり教室、敷地内で咲く四季折々の草花を使った押花教室など、敷地内にあるもの・作ったものを活用するイベントを行なっている。ものづくりを主体としたイベント以外にも、敷地内を住処にしている野鳥や昆虫などの観察会がある。加えて、木々が博物館を取り囲んでいるため、明かりの少ない環境でできる天体観望会も行なっている。このように敷地全体を活用した様々なイベントを提供できるのも当館の特徴であろう。

以上、当館のみどころの一つとして、地形や野外の復元建築物、植栽で府中の縮図を示し、イベントにも活用していることについて紹介してきた。これらに加え、季節に合わせた様々なイベントも開催しており、幅広い世代が学べる・楽しめる博物館となっている。四季折々で異なる姿をみせるので、ぜひとも年間を通じての来館をおすすめしたい。

館のみどころ・オススメ

町田市民文学館ことばらんど　神林 由貴子

＜はじめに＞

当館は、作家・遠藤周作の資料寄贈をきっかけに 2006 年に開館した、常設展示室をもたない総合文学館です。遠藤をはじめとする町田にゆかりのある作家の顕彰を行うと共に、「市民」に「文学」や「ことば」に親しんでもらうことを目的に年 4 回の企画展示、年間を通しての教育普及活動を行っています。また、図書館を併設しており、展覧会に関する本をすぐに読むことができ、貸出も行っています。

＜館の特徴　―遠藤周作の顕彰―＞

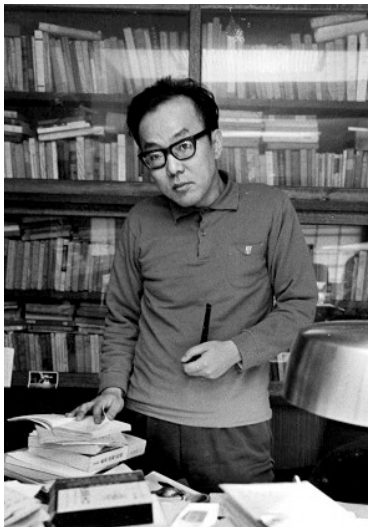
遠藤周作（1923―1996）は、1955 年に「白い人」で第 33 回芥川賞を受賞し文壇デビューを果たして以降、「日本人にとってのキリスト教受容」を生涯のテーマに『沈黙』『侍』などの純文学作品を執筆しました。その一方で、1960 ～ 70 年代には「狐狸庵先生」と称して「狐狸庵もの」「ぐうたらシリーズ」などのユーモアエッセイを発表し人気を博しました。

1963 年から 1987 年までを町田市で過ごし、前出の純文学作品を執筆したのも、「狐狸庵先生」として国民的作家となったのも、町田在住時にあたります。

当館では、この町田市にゆかりの深い作家の顕彰と、市民の皆さまに様々な角度からゆかりの作家を知っていただくために、これまで、生誕 90 年や没後 20 年などの記念年に合わせて展覧会や講演会、朗読会などを開催してきました。

2023 年は遠藤の生誕 100 年にあたり、当館では秋季企画展として記念の展覧会を開催します。

長崎市遠藤周作文学館から、2020 年、21 年に発見された新資料の直筆原稿をはじめとする貴重な資料を借用して、今なお色あせることのない、心に寄り添う遠藤文学の魅力を皆さまにご覧いただきたいと思います。また、春の朗読会を皮切りに、年間を通し数々のイベントを実施する予定です。2023 年の遠藤周作 YEAR にご期待ください。



遠藤周作　1970 年頃
町田市の自宅にて

＜館のオススメ＞

当館では、図書館の分館という特徴を生かし、図書館システムに登録されている収蔵資料はすべて一般の方でも閲覧できるようになっています。

現在、登録済みの特別資料は約 2000 点。作家の直筆原稿や歌人･俳人がしたためた短冊や色紙、絵本作家の絵本原画等、所定の手続きをふめば誰もが閲覧することができます。作家の息づかいが感じられる貴重な資料、皆さまも一度、間近で感じてみてはいかがでしょうか。

遠藤周作　直筆原稿
『侍』（部分）

＜館のみどころ＞

常設展示室をもたない当館は、文学・ことば・文字・絵本・マンガなど、多彩な内容の企画展を開催しています。

2022 年度は、今ブームの「将棋」と「文学」との関係を考察した「〝読む将〟のススメ展」、市内在住の版画家・絵本作家のたけがみたえさんの絵本原画を中心とした「たけがみ ZOO 展」、町田ゆかりのマンガ家・浅野いにおさんの作品を、舞台となった土地との関係性からひもといた「浅野いにお展」を開催し、1 月からは詩画作家・森田 MiW さんの「絵とことば」による作品世界を再現する「いとしきモノ展」が始まります。

年間を通じて、文学好きの方から普段はあまり文学作品に触れていない方まで、幅広い方々に興味を持っていただけるよう、展覧会毎に「文学」「絵本」「マンガ」「ことば」とジャンルを決めて企画しています。「文学」「ことば」を端緒に様々な作品に出会える場として当館を楽しんでいただければと思います。

2022 年度　展覧会チラシ

町田市立自由民権資料館　「館のみどころ・イチオシ」

町田市教育委員会生涯学習部生涯学習総務課　自由民権資料館

はじめに

≪自由民権資料館ってどんな施設？≫

自由民権資料館は２つの特長を持っています。

①「自由民権運動」を柱に据えたテーマ館として、町田を中心に、多摩・神奈川の民権運動関係史料を収集・保管し、整理・研究した成果で常設展示や企画展示などを行います。

また、紀要『自由民権』誌上で、全国各地の民権研究・活動の情報交換の場をもうけるとともに、寄せられた民権運動研究論文や文献情報を掲載するなど、自由民権運動研究のネットワークの核になるよう努めています。

②町田市域に関する歴史資料などを、収集し閲覧できるようにするとともに企画展示をおこない、郷土資料館としての役割を担っています。

所在地：東京都町田市野津田町 897 番地
電　話：042-734-4508

常設展リニューアル

≪自由民権運動と町田≫

明治の前期、日本ではじめて人びとの権利や自由、憲法・国会について真剣に考え、実現をめざしたのが自由民権運動でした。運動をになった人たちは「民権家」と呼ばれ、自分たちの考えを演説や新聞・雑誌で人びとに伝え、運動は全国に広がりました。

このたび、常設展をリニューアルし、自由民権運動をわかりやすくご紹介しています。

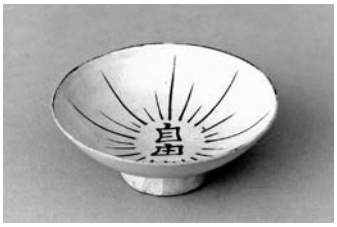
公開日：2022 年 11 月３日（木曜日・文化の日）～

展示構成：

Ⅰ　自由と民権をもとめて
　　自由民権運動とは何かを紹介

Ⅱ　町田の民権家たち
　　町田の代表的な民権家の事蹟を紹介

Ⅲ　武相地域の自由民権運動
　　当時、町田市域も属していた神奈川県の自由民権運動を紹介



【写真】
自由の盃（複製）
小金井市・深澤家所蔵

常設展リニューアル（通史展）

≪町田の歴史―時代でたどる人々のくらし―≫

町田には３万年にわたる歴史があり、過去における人びとのくらしを今に伝える土器、古文書、民具などの歴史資料を大切に守ってきました。本展では、町田市域の歴史を時代に沿って、“くらし”をキーワードにホンモノの資料を通してご紹介します。

公開日：2023 年２月１日（水曜日）

展示構成：

１田端環状積石遺構	２旧石器時代
３縄文時代	４弥生時代
５古墳時代	６奈良・平安時代
７鎌倉～安土桃山時代	８江戸時代
９幕末～明治維新	10 明治・大正時代
11 昭和時代	12 今につながる町田の歴史

【写真】　深鉢形土器／北条氏照朱印状／足踏み脱穀機

出張授業

町田市は、これまで個々に活動を行ってきた考古・民俗・歴史分野を一体的に捉え、新たな町田市の歴史を描いていけるように活動をしています。

町田市教育委員会生涯学習総務課では、職員（学芸員）が地域の歴史資料を活用して出張授業を行っています。

考古・歴史・民俗資料を活用した３コースが用意してあり、小中学校が選んでお申し込みいただきます。

コロナ禍での活動

≪特別講座≫

『町田市史史料集』から史料を選択し、その史料を深く読み解くことによってみえてくる時代背景や地域歴史像を考えます。

全３回開催　　11/13、11/27、12/4

市内の広い会場を借りて講座を実施しました。会場では、マスクの着用及び手指消毒、換気などの感染防止対策を徹底し開催しました。

≪町田の歴史を歩く 2023 ≫

2023 年３月に実施予定で、町田駅を起点に地域に残る史跡を歩いて巡るツアーです。

※その他にも多数の事業を開催！ぜひご来館ください。

青梅市郷土博物館と関連施設の見どころ

青梅市郷土博物館　小峯 勝

1　青梅市郷土博物館

（1）国宝「赤糸威鎧」復原模造

鎌倉幕府の有力な御家人であった畠山重忠が奉納したと伝わる平安時代後期の大鎧です。江戸時代には、八代将軍の徳川吉宗が２度に渡り上覧するなど、武蔵御嶽神社のご神宝として古くから知られてきました。

当館では、２階常設展示室でその復原模造を展示しています。大鎧を奉納したと伝わる畠山重忠は、令和４年の大河ドラマでも登場したことから、当館では、令和４年 12 月 28 日までパネル展示「赤糸威鎧と畠山重忠ゆかりの地」を開催し、復原模造の部品や関連文書などを展示しました。

赤糸威鎧復原模造とパネル展示

（2）都指定有形文化財「駒木野遺跡 26ｂ号住居跡出土土器」

多摩川が最も蛇行した河岸段丘上にある駒木野遺跡において出土した土器で、縄文時代中期に属します。写真左の土器は、口縁部に鼻部を強調した猪、向かい側には天を向きとぐろを巻いた蛇の文様が施されています。写真右の土器は、さらに抽象的な文様で、全体的に鳥がイメージされているのではないかとの説もあります。

２つの土器とも大きく胴部が屈曲し、不安定な形に安定感をもたせるなど、当時の技術力の高さと造形美を知ることができる縄文時代中期の優品です。当館２階常設展示室で展示しています。

駒木野遺跡 26ｂ号住居跡出土土器

2　都指定有形文化財「旧吉野家住宅」

旧吉野家住宅は、新町村（現在の青梅市新町）を開拓した吉野織部之助ゆかりの旧名主家住宅です。嘉永４（1851）年、下長淵村の棟梁であった新兵衛らによって移築されました。住宅の形式は入母屋造り、屋根は茅葺きです。名主格の住宅として、式台付きの玄関や違い棚、附書院などがあります。

近年、茅葺き屋根の傷みが進んだことから、令和４年２月から９月まで茅葺き屋根の葺き替え工事を実施しました。令和４年３月には工事見学会を開催し、屋根の模型や道具を使った説明を行いました。同年 11 月には完成見学会を開催し、学芸員による本住宅の概要説明のほか、葺き替え工事の様子を撮影したドローン映像を上映しました。

葺き替え工事が完了した旧吉野家住宅

3　旧吉川英治邸（青梅市吉川英治記念館）

『宮本武蔵』や『新・平家物語』など数多くの名作を手がけた国民文学作家・吉川英治が、昭和19（1944）年から28（1953）年までの約９年間、家族と共に暮らした旧邸です。昭和 52（1977）年から吉川英治国民文化振興会によって、吉川英治記念館として運営されていましたが、令和２年４月、青梅市が振興会から寄附を受け、同年９月７日の「英治忌」に合わせ、名誉市民である吉川英治の功績を顕彰するとともに、数多くの貴重な資料を、後世に伝えるため、「青梅市吉川英治記念館」として新たに開館しました。記念館では、季節展示やライトアップ、コンサートなどの各種イベントを実施しています。

また、令和４年 11 月の国の文化審議会において、主屋、洋館、土蔵および長屋門の４件を国の登録有形文化財（建造物）とするよう、文部科学大臣に答申がなされました。

青梅市吉川英治記念館の敷地内にある主屋

意外と知らない!?調布市郷土博物館のイチオシ

調布市郷土博物館　小堀 槙子

調布といえば、古刹・深大寺、近藤勇のふるさと、映画のまちなどのイメージを持つ方が多いでしょうか。調布市郷土博物館の常設展示「調布の歴史」では、原始・古代から現代まで調布の人びとのあゆみを紹介していますが…実は他にも意外と知られていないかもしれないイチオシがあります。今回の特集テーマにあわせて、皆さんに知っていただきたいオススメポイントを郷土博物館の展示や収蔵資料からピックアップしてご紹介します。

実はたくさんコレクションしています！　郷土玩具

当館では、日本でも屈指の郷土玩具コレクターとして知られる加藤文成氏から市に寄贈いただいた約6,000点以上に及ぶコレクションを所蔵しています。昭和時代に、全国を自分の足で歩いて集めた膨大なコレクションは、木や紙や竹、焼き物で作られた日本各地の郷土玩具や縁起物から、民間信仰に関わるものまで多岐にわたります。現在では、形が変わってしまったものや、失われて残っていないものも多く、貴重なコレクションです。

令和４年度はギャラリー展示「信仰行事と祭り」（９月３日～12月４日開催）、「卯年の郷土玩具」（12月10日～令和５年２月19日開催）で紹介しました。

＼ここがオススメ！／

「加藤文成氏は、資料を集めるだけでなく、産地や製作者の情報を細かく記録して、手づくりの図録にまとめていました。収集した郷土玩具への深い愛情が感じられます」

加藤文成氏手製本

意外と知らない？調布ゆかりの美術に触れてみませんか

収蔵品展ポスター

当館では、調布にゆかりのある作家の美術作品を所蔵していることをご存知でしょうか。令和４年度収蔵品展「調布ゆかりの美術～市川銕琅・関野準一郎～」（10月29日～12月11日開催）では、調布生まれの木彫工芸作家・市川銕琅（1901～1987）と調布を拠点に活動した版画家・関野準一郎（1914～1988）の作品を紹介し、ふたりの彫技を楽しんでいただける展示を開催しました。

市川銕琅は、加納銕哉に師事して若くして奈良に移り、木・竹などの表面に線刻する銕哉ゆずりの「銕筆」技法を施した茶道具や木彫床飾りなど、煎茶道に関わる作品を多く手がけました。青森生まれの関野準一郎は、今純三・恩地孝四郎に学び、銅版画・木版画をはじめとする多彩な作品を世に送り出しました。

＼ここがオススメ！／

「市川銕琅作品のまるで筆で描いたような繊細な彫りは、思わず溜息が出てしまうほど見事なもの。一部の作品は当館のデータベースで紹介していますので、展示期間以外もお楽しみいただけます」

調布市郷土博物館収蔵資料データベース　http://jmapps.ne.jp/chofu/

水車のある暮らし　深大寺水車館

今や住宅地が大部分を占める調布でも、昭和30年（1955）ごろまでは農村風景が広がっていました。

深大寺元町にある深大寺水車館は、武蔵野台地での暮らしを伝えるため、地元で使われていた共同水車を再現して平成４年（1992）に開館しました。

明治末期から昭和30年代にかけて地域の人びとが利用した共同水車は、深大寺の湧水を水源とする逆川から水を引き、精米や製粉を行っていました。深大寺水車館の水車小屋には、つき臼と粉ひき臼が備えてあります。水車のまわる音を聞きながら、かつての農村風景に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

＼ここがオススメ！／

「水車小屋に併設している展示回廊では、武蔵野台地での暮らしを伝える展示を行っています。水車館を見学した後は、深大寺界隈の散策も楽しんでみてください」

※現在、深大寺水車館の水車は修理中のため、水車小屋内の見学等を休止しております。詳細は、市ホームページ等でご確認ください。

番外編　ツイッターで発信中！＃調布の民具

当館では、昭和49年（1974）の開館より収集した約7,000点の民俗資料を所蔵しています。郷土博物館の公式ツイッターでは、長年の調査記録を元に、民具の使い方や来歴について、民俗担当の学芸員が週１回程度のペースで紹介しています。

＼ここがオススメ！／

「やさしい語り口とベテラン学芸員ならではの視点で民具を紹介する記事は、当館のツイートの中でも「いいね」を多くいただく、隠れた人気シリーズです」

調布市郷土博物館公式ツイッター　@chofu_museum

瑞穂町郷土資料館のみどころ ―「バーズアイ瑞穂」―

瑞穂町郷土資料館　北爪 寛之・磯部 隆之

○「バーズアイ瑞穂」とは

瑞穂町郷土資料館けやき館の１階・入口を入ってすぐのスペース（ガイダンスホール）の床一面に、8.5ｍ×９ｍの大きさで瑞穂町周辺の航空写真バーズアイ瑞穂が広がっています。初めて当館に来館された方は、先ずその大きさと写真の精密さに、たいへん驚きます。

当館は、瑞穂町が策定した、水･緑と観光を繋ぐ回廊計画「みずほきらめき回廊」の拠点施設となっています。来館者に町内や周辺地域を紹介・案内する際にも、見てすぐにわかるバーズアイ瑞穂が大きく貢献しています。

バーズアイ瑞穂・全景〔２階から撮影〕

○バーズアイ瑞穂の特徴

バーズアイ瑞穂は、平成 25 年（2013）８月に、高度約 1,700 ｍから撮影した縮尺 1/1000 の航空写真です。細部までしっかりと写し込まれているため、ビルなどの大きな建物はもちろんのこと、一軒家の住宅の屋根までも判別できます。そのため、瑞穂町やその周辺に住んでいる方は、自宅を探すこともできます。

撮影範囲は、瑞穂町を中心に南北 8.5㎞東西９㎞の広さで、北は入間市、東は武蔵村山市・所沢市・立川市、南は福生市、西は羽村市・青梅市・あきる野市の一部をそれぞれカバーしています。

バーズアイ瑞穂・部分

バーズアイ上の写真には、公共施設や史跡・観光スポットなどに名称が付けられており、現在地（瑞穂町郷土資料館けやき館）や目的地などを素早く見つけることができます。縮尺は 1/1000 なので、写真上の 10㎝が実際の 100 ｍとなり、目的地までの大まかな距離もすぐに分かります。

バーズアイ瑞穂は、２階の展示ギャラリーからも見ることができます。上から見ると、その大きさにますます驚きますので、当館に来館された際は、是非２階から鳥のようになって、瑞穂町を上空からご覧ください。

○活用方法

団体見学・社会科見学などで初めて来館された方は、まず写真上に入っていいものか戸惑うので、写真の中央へ案内します。家一軒ずつはっきりわかりますので、そちらに注目しがちになりますが、案内する際には小河川の蛇行する流路、新田の短冊状の地割や屋敷林、畑の種類や途絶した旧道も案内することもできます。このように土地利用の様子、違いを案内、理解するのには写真上を歩けることは大変便利です。

バーズアイ瑞穂は航空写真として見ることもできますが、調べるツール（「瑞穂町探検アプリ」）として活用することもできます。これは、専用タブレットを使ってバーズアイ瑞穂の中の特定のポイントを撮影すると、そのポイントに関係するデジタルアーカイブの情報を得ることができるというシステムです。例えば、瑞穂町の小学校の写真を撮ると、学校の解説や昔の学校の写真、校歌、関連資料などを見ることができます。こうしたポイントは、町の史跡や自然、産業など町の各地に設けていて、気になる写真を撮ることで、能動的に情報を得ることができます。このように瑞穂町のスポットと歴史、自然などの情報を紐付けすることで、より直感的に瑞穂町について調べることができます。

瑞穂町探検アプリ・部分

○おわりに

バーズアイ瑞穂は写真の撮影から約 10 年が経とうとしています。道路の変更や商業施設、住宅地の変化は著しいものがあり、10 年前とは景観が異なってきています。今後も少しずつ変化が生じていき、いずれは改修の必要も出てくるでしょう。

しかし、平成 25 年に撮影した高精細の画像として、当時の瑞穂町の様子を映す貴重な資料としての価値は今後も変わることはありません。

ふれあい館の見どころ・ここがイチオシ！

ここでのイチオシテーマは「郷土芸能」　　奥多摩水と緑のふれあい館 神山 正明

東京都水道事業の紹介と奥多摩の歴史文化を発信

館内に入るとまず１階の奥多摩町歴史民俗資料展示室「水のふるさと」で奥多摩町の歴史文化を紹介しています。ここでは縄文時代から現代までの歴史を追った形で展示がされており、町内の遺跡から出土された土器、石器をはじめ、武家文書や、庶民の生活を記した古文書等を紹介しております。

小河内ダムに沈む以前の旧小河内村の時代の生活用具は、国指定の重要民俗文化財として保管され、一部公開もしております。

近代の展示では集落を守る現在の消防団の草分けともいえる自警団の活動や当時の庶民の暮しをパネルで紹介しています。

町全体が山で囲まれる奥多摩は、一度火災が発生すると、大きな被害を受けてしまいます。有事の際に地域を守るべく、各地域の若者らで組織される消防団では各集落の若者が日夜消防技術の向上を図るため厳しい訓練が行われてまいりました。江戸期から昭和初期頃まで使用された消防用具の移り変わりの展示を行っております。

かつて地域の主要産業でもあった「林業」分野の展示では、戦前、戦後の林業に関する技術の変化が見て取れます。「農業」分野では、現在見ることのできなくなった養蚕が盛んに行われていたこと、日常の食のための農業と換金のためのワサビ栽培やその出荷のための技術を紹介しております。

展示室では、各所で古くから盛んに行われてきた、地域の財産でもある郷土芸能の紹介と、国指定の貴重な民俗資料をはじめ、山里の暮らしや仕事をテーマとした展示を通じて、奥多摩の魅力を発信しています。

―　奥多摩の短い夏の週末はお祭り三昧！　―

奥多摩は貴重な伝統芸能の宝庫

奥多摩町には数多くの郷土芸能が存在し、最も多い 14 の地域で伝承される「ささら獅子舞」、２つの地域で守られた「神楽」、国指定の重要無形民俗文化財で令和４年度ユネスコ無形文化遺産に登録された小河内の鹿島踊、現在国内で３か所のみで行われているその内の一つである「川野車人形」、奥多摩では珍しい神田囃子系列の２つの「祭囃子」を紹介しています。また、過疎高齢化が進み現在上演を一時休止している芸能の用具も展示しております。

14 の集落で演じられる獅子舞の違い？

獅子舞にはそれぞれ特徴があり、袴をつけた３匹の獅子が優雅に舞う獅子舞と、裾に脚絆を巻き暴れ狂う様子を演じ、獅子狂いとも呼ばれる獅子舞の大きく分けて２つの形の獅子舞が奉納されます。

（優雅な舞を披露する日原の獅子舞）

（９月の第１日曜日の日原一石山神社祭礼で奉納されます）

（勇壮な舞を披露する小河内原の獅子舞）

（９月第２日曜日の小河内神社祭礼に奉納されます）

小河内の鹿島踊がユネスコ無形文化遺産に登録されました

（国指定重要無形民俗文化財「小河内の鹿島踊り」）

（９月第２日曜日の小河内神社祭礼に奉納されます）

かつて鹿島踊は旧小河内村の加茂神社（日指・ひさし、岫沢集落の氏神）と御霊神社（南集落の氏神）の祭礼に奉納されておりました。古くは祇園踊と呼ばれていて、京都祇園祭と同じ旧暦の６月 15 日に祭礼が行われておりました。いつ頃からこの舞が行われたかは不明で、京都から来た公家の落人が岫沢に隠れ住み伝えたとか、旅の僧侶よって伝えられたとか諸説あります。鹿島踊は伊豆方面をはじめ各地で行われておりますが、若衆が女装して踊るのは小河内独自のものと言われております。昭和 13 年の小河内ダム建設のため全戸が移転を余儀なくされ、一度は途絶えた舞を有志により再び行うようになり、昭和 27 年 11 月に東京都指定無形民俗文化財の指定を受け、昭和 55 年１月には国の重要無形民俗文化財としての指定を受け現在まで継承してまいりました。

さらに令和４年 11 月 30 日にユネスコ無形文化遺産の登録を受けることとなりました。

鹿島踊の舞子の衣装（振袖）の大正の終り頃まで使用された保存用の大変貴重な衣装も展示しております。その他、網やコキリコなどの実際に使用された小道具も併せて展示しております。

―アクセス―

車：圏央道青梅 IC より青梅街道を山梨方面に約 30㎞

電車：JR 青梅線終点奥多摩駅より、西東京バスで約 20 分

お問い合わせ電話番号　0428-86-2731 水と緑のふれあい館まで

福生市郷土資料室のコレクションと今後の展望

福生市郷土資料室　青海（せいがい） 伸一

はじめに

福生市郷土資料室は、令和４年４月から令和５年 12 月の予定で、空調等改修工事に伴い休館しています。開館以来初の長期休館で、様々な制約がある中、博物館活動を継続しています。今回の報告では、再開館後の展望と、当館のイチオシ資料との関係を紹介いたします。

展示室の再開に向けて

今回行う改修工事は、施設の機能の維持向上が目的で、展示のリニューアルを目的としたものではありません。しかし、展示室にも工事が及ぶことから、展示内容や展示方法の更新を行うべく検討を重ねています。

常設展示スペースには、これまで郷土資料室を名乗りながら、福生の歴史を概観することのできる展示がなかったことから、歴史展示のスペースを新たに設ける計画です。また、福生の産業などを伝えるコーナーを作るとともに、小学生の学習単元に対応した昔の住宅の再現展示も行いたいと考えています。

このほか、今回のテーマに関係する、福生市郷土資料室で所蔵している様々なコレクションなどを入れ替えながら展示する「今月のイチオシコーナー」の新設も検討しています。

普段から問い合わせの多い武州下原刀や、なかなか展示することのできない資料などを少しずつでも皆さんに見てもらえる機会とするよう、スペースとしては小さいのですが、新たなコーナーを検討しているところです。例えばどんなものがこのコーナーで紹介できるのか、少し具体的に紹介いたします。

福生市郷土資料室のコレクション他イチオシ資料

福生市郷土資料室にはいくつかコレクションと呼べる資料群が存在します。その筆頭格が、武州下原刀を中心とする刀剣のコレクションです。

福生市郷土資料室で所蔵する刀剣の中心をなすのは文化庁から譲与された赤羽刀と呼ばれるものです。特に多摩地域ゆかりの武州下原刀を中心に 97 振りの譲与を受け、現在では 130 振りを超える刀剣を所蔵しています。

ほかにも、福生市に関係のあるものでは、市内出身で幕末に活躍した俳諧師である森田友昇の生家に伝わった江戸時代から明治時代にかけての文芸資料（森田文庫）約 2,900 点、一時福生に居住していたこともある日本野鳥の会創設者の中西悟堂氏の御親族から寄贈を受けた中西悟堂関係資料約 650 件などがあります。

また、ご縁があって寄贈に繋がったものとして、俳諧研究者の尾形仂（つとむ）氏の御親族から寄贈を受けた（経緯については本誌 34 号参照）穎原（えばら）退蔵・尾形仂コレクションと名付けられた「新聞錦絵」等の資料が約 110 点、多摩地域を題材に多くのむかし絵を描かれた画家の松下紀久雄氏の御親族から寄贈を受けた絵画等資料約 540 点もあります。

さらに、歴代収集に努めてきた 1800 年代後半を中心とする主にイギリスで作られた「グリーティングカード」が約 390 点、明治期の海外へのお土産品として人気を博した「ちりめん本」が約 100 点、記念切符や鉄道関連の資器材などを含む鉄道関係資料約 1,400 件など、多くの資料群を所蔵しています。

まとめに代えて

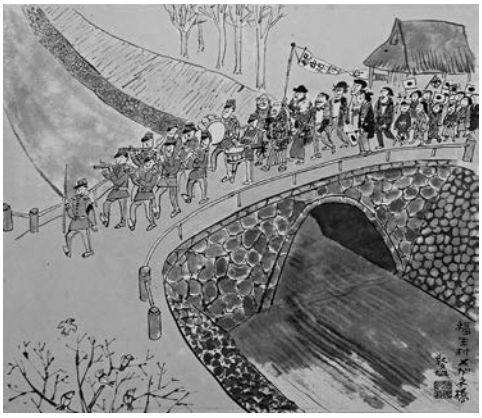
これらの資料群は、これまで数年に一度といったペースでしか展示に活用することができていませんでした。今後は、新たに設置する今月のイチオシコーナーを用いて、数は少ないですが、こうした多様なコレクションの一端を来館者に触れていただけるよう展示活動を進めていきたいと思っています。

令和６年１月に再開館予定の福生市郷土資料室の展示活動を楽しみにお待ちください。

【森田文庫】
奥原晴湖 自画賛幅 群鶴図

中西悟堂 スケッチ
三頭御前（東三頭）山頂

【穎原退蔵・尾形仂コレクション】
大坂日日新聞　第 14 号

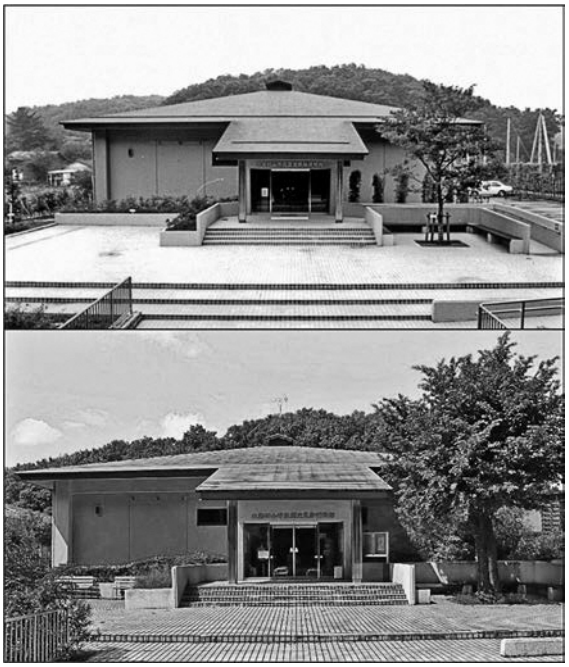


松下紀久雄　福生村メガネ橋

武蔵村山市立歴史民俗資料館　開館40年が経過して

武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市立歴史民俗資料館は、昭和56（1981）年11月３日に狭山丘陵の緑豊かな自然を背景として、１万数千年前に始まる武蔵村山市の歴史をはじめ、人びとの生活や自然環境の変遷等に関する資料を収集・保管するとともに、これらについての調査や研究活動を行い、その成果を広く一般市民に公開し、市民の教養、学術及び文化の発展に寄与することを目的として開館しました。そしてコロナ禍の令和３（2021）年に開館40周年を迎えました。ちょうど前年の令和２（2020）年には市制施行50周年の節目であることから、毎年10月に開催している特別展を、市制施行に至るまでの市域の歴史を振り返るとともに、市制施行後の変遷をたどる内容で開催しました。開催にあたり、市の歴史を通史的に展示している常設展示も特別展の一部として組み込むこととした結果、常設展示についても簡単に展示替えを行うこととしました。



武蔵村山市立歴史民俗資料館　外観
（上：昭和56年撮影　下：令和３年撮影）

当館の常設展示は開館以降、平成16（2004）年度に全面的にリニューアルを実施した以降は大掛かりな展示替えを行っていませんでした。今までの常設展示の大型パネルは専門的な内容が多数含まれていたことから、今回は社会科見学で来館する小学生にもわかりやすく理解できる内容とし、また、市域の原始から現代までの通史及び伝統文化や生業、自然などを全体的に学べる内容を目指しました。

特別展の構成を考慮しつつ、常設展示を見直した結果、以下の問題点が見つかりました。①ウォールケース及び展示ケース内の考古出土遺物がスペースを多く使用し、背面に掲示されている項目ごとの大型パネルの内容と位置がずれてしまっている、②市域の産業などの展示場所が統一されていない、③特別展等開催のたびに少しずつ追加された資料及びキャプションが増え、全体的に統一感がなく、また、フォントサイズが小さくルビも振られていないため見にくい、などです。その他、こまごまとした改善すべき点も見つかり、特別展の会期開始直前の13日間を臨時休館とし、展示替えを実施しました。

前述した問題点の解決策として、①スペースを圧迫していた考古遺物資料の展示資料を減らし、他の資料を展示できるスペースを作る。また、大型パネルに掲載されている内容が展示資料と合致しなくなっていることから撤去し、新たに時代ごとに作製する。②展示場所の入れ替えを行い、エリアごとにまとめて展示を行う。③常設展示に使用していたキャプションをすべて新たに作製する。といった作業を行った結果、以前の常設展示よりすっきりと見やすく、また、市域を通った軽便鉄道に関する展示や市内小学３年生の社会科見学で学ぶ昔のくらしや道具についても充実させることが出来ました。

常設展示（令和２年撮影）
（上段：展示替え前　下段：展示替え後）

さらに、エントランスホールのパネル撤去に伴い空いたスペースでは、不定期でミニ収蔵資料展示を開催しています。これは開館時から現在までに未公開だった収蔵資料や新規収蔵資料について展示を行うもので、調査・研究活動の結果をさらに公開できるようになりました。

今後も開館目的を忘れず、来館者の皆様に武蔵村山市の歴史や文化について分かりやすい展示を目指し、日々努力を続けていきたいと思います。

常設展示案内パンフレット

パレオパラドキシア化石と旧市倉家住宅

五日市郷土館　鈴木 英里香

五日市郷土館について

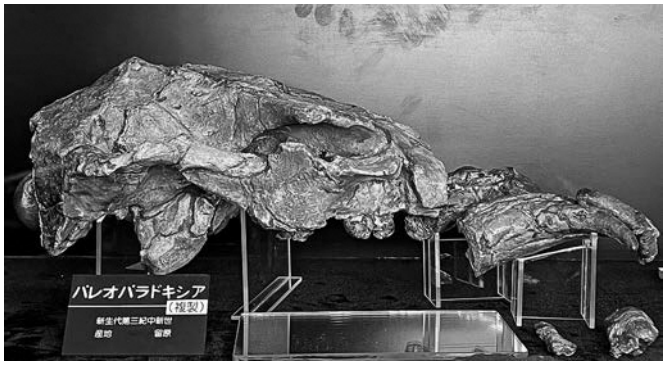
五日市郷土館は五日市地域の「里のくらし」「川のくらし」等のテーマ展示や、化石、五日市憲法草案の関係資料、黒八丈関係資料、考古資料を展示している総合博物館です。今回は常設展示のイチオシを２つ、ご紹介します。

パレオパラドキシア

イチオシ展示１つ目は、パレオパラドキシアの頭骨の化石です。この化石は昭和 63 年に武蔵五日市駅近くの秋川で発見され、五日市郷土館に寄贈されました。

パレオパラドキシアはおよそ 1900 万年前から 1200 万年前にアメリカ西海岸から日本にかけての海辺に生息していた、カバのような姿をしていたと考えられる動物です。この仲間はデスモスチルス類、または束柱 (そくちゅう) 類と呼ばれ、丸い柱を束ねたような歯が特徴です。ちなみに「パレオパラドキシア」は、ラテン語で「古くて不思議なもの」という意味です。

五日市郷土館のパレオパラドキシアが見つかったのは「小庄泥岩部層」と呼ばれる層の中で、一緒に発見された化石からおよそ 1500 万年前に生きていた個体と考えられています。日本列島の歴史からみれば、およそ 2000 万年前から 1500 万年前は日本列島の原型が形成された時期にあたります。日本列島のもとが誕生した頃に、人間より早く陸に住んでいた動物がカバのような姿の生き物だったとは驚きです。



パレオパラドキシア　頭骨化石（レプリカ）

１階の展示室では頭骨化石のレプリカを公開しており、円柱形の歯の特徴などを観察することができます。世界的にも発見例が少なく、特に頭骨は希少な資料です。

旧市倉家住宅

イチオシ展示２つ目は、旧市倉家住宅をご紹介します。

旧市倉家住宅は文政９年（1826）に建築されたと考えられる古民家です。平成 10 年にあきる野市の有形文化財に指定され、平成 10 年から平成 12 年にかけて解体工事および調査、復原作業を行い、現在は五日市郷土館の西側に保存されています。オカッテや便所など、生活様式の変化に対応した箇所は改造されていましたが、それ以外は建築当時の姿をとどめていて、良好な保存状態でした。

旧市倉家住宅

旧市倉家住宅は床上部の表側にザシキとデイ、裏側にオカッテ・オク・納戸を配置した変形四間型（よつまがた）民家です。四間型民家は江戸時代末から明治時代の農家の間取りとしては、一般的な形式です。旧市倉家住宅はこの形式の民家で都内に残る文化財としては、古い事例にあたります。

旧市倉家住宅では、正月飾りやひな人形、五月人形、十五夜、七五三などの年中行事の展示のほか、庭ではキュウリやナス、サトイモ、あきる野市とゆかりのある「のらぼう菜」などの栽培展示をしています。また、８月はミニコンサート、３月は琴の演奏などのイベントも実施しています。コンサート会場とは少し違う、特別な体験ができますよ。

最後に、ザシキのいろりではほぼ毎日火を焚いています。来館された際には薪や炭のはじける音を聞きながら、縁側に腰掛ける時間を過ごしてみてはいかがでしょうか。

旧市倉家住宅　いろりから土間を見たところ

玉川上水はじまりの地の博物館

羽村市郷土博物館　枝野 孝彦

【はじめに】

羽村市郷土博物館は、玉川上水の出発点である「羽村取水堰」の対岸、多摩川のほとりに、昭和60年（1985）４月に開館しました。外観は全面銅板葺き、三角屋根が特徴的で、自然に囲まれた場所に建っています。

羽村市の自然・風土・歴史・文化に関して、資料の収集、保存、調査研究を行い、その成果を、展示や学習会、資料集の刊行等、各種事業を通じて公開することで、市民の文化的想像を育む「学び」の場として活動してきました。

【常設展示】玉川上水一の水門　実物大模型

江戸時代の羽村堰に造られていた玉川上水の水門を、実物大で再現しています。ここから取り入れた多摩川の水が、世界有数の大都市、江戸の生活を支えました。その大きさから、当時の工事規模の大きさや技術力の高さを体感していただけます。

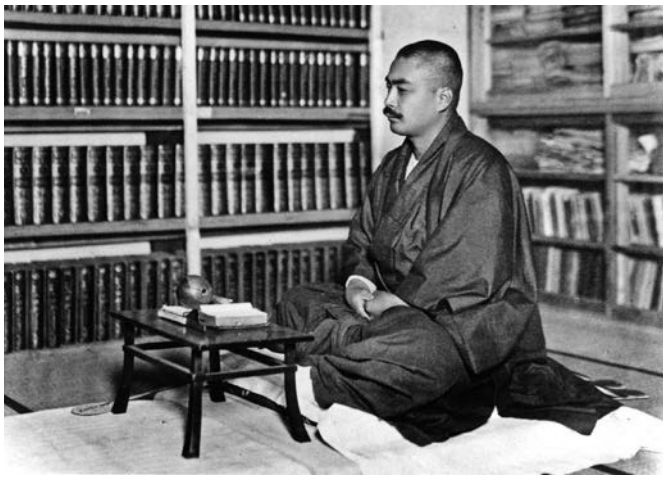
また、東京都内の小学校４年生社会科の学習内容に玉川上水と玉川兄弟が含まれることから、学習の理解を深めるための取り組みとして、小学校の団体見学の際に玉川上水に関する展示説明を実施しています。例年、100校を超える小学校にご活用いただいています。

その他展示資料…江戸時代の羽村堰再現模型・上水で使われた木樋と井戸・御用留（ごようどめ）・明治初期の鉄製水道管・現在の水門（実物大再現）ほか

【常設展示】中里介山の世界

大正から昭和まで28年間書き続けられた小説『大菩薩峠』。作者の中里介山は明治18年（1885）に羽村で生まれました。中里介山の生涯と作品の世界を、自筆原稿や落款、雅印などの資料や映像でつづります。中里介山、本名弥之助は、明治18年（1885）４月、玉川上水の取水堰にほど近い多摩川畔の水車小屋で生まれました。

その他展示資料…刊行本（『大菩薩峠』各版ほか）・日記・遺品・自筆書画ほか



【屋外展示】旧下田家住宅（国指定重要有形民俗文化財）

この住宅は、羽村市羽西にあった民家を寄贈いただいたもので、昭和57年(1982) ３月に現在の郷土博物館の敷地に移築復原しました。調査により、弘化４年（1847）に建設されたことが明らかになりました。

入母屋づくりの茅葺（かやぶき）民家で、この地方の一般農家の姿をよく示しています。建築後、四ツ間として改造し使用していましたが、移築にあたり当初の広間型に復原しました。旧来の生活様式をよく守り、建物の改造も少ないことから、この民家で使用されていた生活用具と建物の1,210点が「羽村の民家（旧下田家）とその生活用具」として国の文化財指定を受けました。

このほか、企画展や季節かざり、体験学習会など、様々な事業を実施しています。ぜひご来館ください。

清瀬市郷土博物館の知られざる一品

清瀬市郷土博物館　中野 光将

清瀬市郷土博物館では数年に一度、常設展示のリニューアルを行っています。その中で、開館当時から変わらず展示している資料がある一方で、近年の再調査によって再評価されてきた資料や発掘調査などによって新たに展示すべき資料などが存在しています。

近年では、令和３年12月～令和４年３月頃にかけて常設展示室を一部リニューアルしています。その結果、明治時代以降の歴史と国指定重要有形民俗文化財「清瀬のうちおり」を中心に展示している民俗展示室と旧石器～江戸時代までを中心とした歴史展示室に再構築しました。民俗展示室には「清瀬のうちおり」、歴史展示室には「野塩前原遺跡出土の有孔鍔付土器」と、それぞれの展示室には、目を引く所蔵資料が存在しています。

「清瀬のうちおり」に関しては、国指定重要有形民俗文化財であることから様々な媒体などで紹介されており、既に周知されています。かたや「有孔鍔付土器」に関しては、数年前から展示されていましたが、当館で開催した特別展「柳瀬川縄文ロマン」展以降、知る人ぞ知る資料として存在しています。

今回は、最近博物館内で地味に周知化を狙っているこの野塩前原遺跡出土の有孔鍔付土器について紹介していきたいと思います。

有孔鍔付土器とは

有孔鍔付土器は、縄文時代中期（約5,000 ～ 4,000年前）の関東地方、長野・山梨県などの中部地方に見られる縄文土器の１つです。この土器には２つの特徴があります。１つ目は、平らな口縁の下に孔（こう）と呼ぶ小さい穴が等間隔に付けられていること。２つ目は、口縁の下には、刀の鍔のような盛り上がりがあることがあげられます。この２つの特徴を持つ縄文土器を有孔鍔付土器と呼んでいます。

全体的な形状は、樽あるいは壺のような形をしており、小型のものから今回紹介する土器のように大型なものまで様々なサイズが存在しています。

この特徴的な土器が何に使われていたか、未だにはっきりしていませんが、①口の部分に動物の皮を張って、孔の部分に括り付け太鼓として使用した、②ブドウあるいはコメなどを入れて蓋をして発酵させ酒造りの道具と考えられています。

展示資料　野塩前原遺跡出土有孔鍔付土器

今回、紹介している有孔鍔付土器が出土した野塩前原遺跡は、清瀬市野塩４丁目に広がる縄文時代中期を中心とする遺跡です。この場所は、清瀬市を流れる柳瀬・空堀川が交わる台地上であり、市内でも縄文時代の遺跡が数多く見つかっている場所になります。当市からは、今回の展示資料を含めて、野塩前原遺跡から大型・小型の計３点出土しており、この遺跡は、市の財産としても貴重な発掘成果を提供してくれています。

展示している有孔鍔付土器は、竪穴式住居から潰れた状態で見つかりました。この土器は、大変脆く壊れやすい状態でしたが、復元すると市内で出土している中でも最も規模が大きいことが解り、外面には特徴的な模様が施されていることも解りました。大型で特徴的な模様が認められることから貴重な資料として、常設展示に数年前から展示されています。

野塩前原遺跡出土　有孔鍔付土器

これからの有孔鍔付土器の周知へむけて

今回紹介している有孔鍔付土器は、多摩地域の中でも比較的規模の大きいものであることが近年判明しています。ますます、この土器が博物館の目玉資料の１つになる可能性が出てきました。

今後の展開として、この土器をモチーフとしたキャラクター化を進めています。現在、当館では公式キャラクターのひいらぎちゃんがいますが、それに続くオリジナルキャラクターを作成し、グッズの展開を図っています。さらには、令和４年に歴史展示室の大規模リニューアルが控えているため、そこで目を引くような展示方法を検討しています。

さらなる、新しい展開を迎える清瀬市郷土博物館に今後も是非とも興味を持っていただければ幸いです。

ひいらぎちゃん

新キャラクター

立川の原風景を今に伝える絵画

立川市歴史民俗資料館　漆畑 真紀子

はじめに

立川市歴史民俗資料館は、立川市の歴史や文化、自然風土に関する市民の知識と理解を深め、市民文化の向上に寄与するため、1985（昭和60）年12月1日に開館しました。今年2023（令和5）年で開館38年を迎えます。資料館の基本テーマには、「1．自然と人間のいとなみ、2．立川のきのう、きょう、あす、3．未来に伝える先人の知恵や知識」を掲げており、収蔵資料だけでなく館の活動・自然環境など〝館のみどころ〟は数え切れませんが、本稿では、今ではもう見ることが出来ない立川の原風景を伝えるイチオシ資料「立川村十二景」をご紹介します。

立川市指定有形文化財「立川村十二景」とは？

「立川村十二景」は、立川市曙町に居住していた馬場吉蔵氏が子どもの頃、立川がまだ村だった明治30年代に村内の主要な12か所をスケッチし、これをもとにして昭和初期に水彩画に描き上げたものです。資料の形状は手鑑で、大きさは畳んだ状態で縦42.7cm×横30cm×厚さ6.3cm、絵画は縦31cm×横23cmあります。絵画の頁前にはそれぞれ、作者自身の言葉でその景色にまつわる言葉が添えられており、「時勢の移り変りに樹木建造物等が日毎に消滅して行くので古い立川の姿を惜みなつかしい立川村時代の風物を過去の写生並に記憶を呼び起して絵（ママ）いた」「私ハ此の古い立川の風物を非常に愛し何とか立川市民の為子孫の為に永久に保存したい考へに前々からあつた」（『立川村十二景』前書きより）として、立川の街の風景を描いたといいます。カメラで写真を撮る事自体がまだ珍しい時代にあって、絵画という写実的な形で後世に伝えていることが立川市にとって貴重な財産であるとして、1976（昭和51）年に「市重宝第十三号」（市重宝＝現在の立川市指定有形文化財）に指定されました。個人所蔵の資料であり、現在は当館に寄託されています。

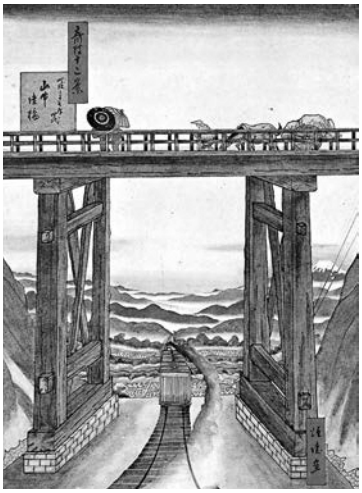
作者である馬場吉蔵氏（画号：恒陵）は、明治大学在学中に日本画家・佐竹永陵に師事して南画を学び、郷土画家として画業に励みました。この絵が描かれた明治30年代から昭和初期は、立川の街が急激に発展を遂げて、かつての風景が失われつつあった時期にあたります。

立川は近代、特に1889（明治22）年に甲武鉄道（現在のJR中央線）が開通し、立川駅が開設したことで急速な発展を遂げた街です。その変化はめざましく、街の姿が一変してしまうほどの勢いでした。立川駅という交通の要衝の存在がきっかけともなり、1922（大正11）年には立川飛行場が開設、陸軍第五聯隊が岐阜県各務ヶ原より移転し、さらに翌年1923（大正12）年の関東大震災の影響から民間の航空会社も立川飛行場へ移転してきたことで、〝空の都〟として世界にも知られる都市となりました。これらの歴史は現在の街の造成にも深く関わっています。

「明治三十七年時代」の立川の風景

その名称の通り、「立川村十二景」は全12点の絵画から成りますが、このうち印象的な2点を取り上げてご紹介します。

○「明治三十七年時代　山中陸橋」



本誌『ミュージアム多摩№41　特集 多摩の近代化―「令和」へのあゆみ―』の表紙にしていただいたものです。描かれたこの場所は、鉄道の敷設のために掘削された切通しで、この部分の土は根川・多摩川間の砂地に運ばれ、線路の土台を築きました。作者自身も「此の橋から見る玉川及日野町をへたてゝ箱根連山を見る景ハ又格別である」と評しています。立川から日野方面に向って走りゆく蒸気機関車の背を追ったアングルで、右手奥には富士山が描かれています。橋の上には、番傘をさした女性、荷車をひく馬と蓑をかぶった人物が、雨に降られて足早に通りすぎていく様子が伝わってきます。

○「明治三十七年時代　立川村澤立川村尋常高等小学校」

描かれている立川村尋常高等小学校は現在の市立第一小学校にあたります。1870（明治3）年の創立で、都内では最も古い小学校です（創立当初は神奈川県下）。立川近代教育の始まりを告げる学校であり、作者の馬場吉蔵氏も一時この学校の代用教員を勤めていたといいます。

生徒らが登校する場面を描いているのでしょうか、教師らしき人物にお辞儀している生徒、保護者に付き添われて登校する生徒が描かれています。生徒の格好は着物に下駄か草履で、教材は背中に結わえた風呂敷包みのなかでしょうか。校舎の前の桜と椿が咲いていることから、3月から4月初旬の風景と考えられます。

おわりに

この「立川村十二景」は風景ばかりではなく、先述のように当時の風俗をもよく伝えており、点景（趣を出すために描き添えられる人物や動物など）がひとつひとつ面白く、人々の生き生きとした生活が見て取れ、郷土文化を伝えるものとしても貴重なものです。紙幅の関係で、12点の絵画すべてをご紹介できませんでしたが、詳細をお知りになりたい方は是非当館へご来館いただければと思います。

檜原の歴史と建物

檜原村郷土資料館　清水 達也

郷土資料館の展示について

檜原村には古くからの歴史と自然がたくさん残されており、檜原村郷土資料館の歴史と民俗のコーナーでは、縄文土器から中世の甲冑、林業などの生業で使った道具などを、自然と観光のコーナーでは村の地形模型や四季の景観などを見ることが出来ます。

また、鑑賞室にて「檜原村歳時記」や「重要文化財小林家住宅修復記録映像」などがご覧いただけます。

今回は当館の展示２点をご紹介いたします。

檜原城主平山氏重所用五枚胴具足

檜原城主であった氏重が所用していたと伝えられ、氏重が自刃した千足地域のお寺より見つかった甲冑が一部ではありますが現存しており、平成 30 年４月１日に檜原村指定文化財として指定され、資料館で展示をしております。

伝檜原城主平山氏重所用甲冑

北谷と南谷の分岐点である橘橋交差点の正面にある山には、中世の頃まで檜原城と呼ばれる山城がありました。この城は室町時代に鎌倉公方の足利持氏と関東管領の上杉氏憲との争いの際、甲斐の国の武田信満が関東に進出したりするようになったため､持氏が応永 20 年（1413 年）頃に平山三河入道正泰（恭）に築城させたと伝えられており、その後時代が進み戦国時代になると後北条とよばれた北条氏が小田原城を中心に勢力を広げ、第三代北条氏康の三男である氏照が滝山城主、さらに八王子城主となると、その出城として檜原城も支配下に置かれるようになり甲斐の武田との境目を守る重要な拠点となりました。

天文 15 年（1546 年）に起きた川越の夜戦のあと、平山政重（氏重の父）は後北条氏の岩槻城攻めに参加し討死したと伝えられ、このとき遺児の１人である長寿（氏重の幼名）が北条の庇護のもと幼くして檜原城の城主となりましたが、天正十八年、豊臣秀吉による小田原征伐の際に檜原城は落城し氏重も千足地域にて自刃したといわれております。 甲冑の現在は鞠（しころ）（首を守る）・胴（５枚中３枚）そして草摺（くさずり）（太ももを守る）の部分が残されており、胴の部分が５つで構成され失われた前胴などとあわせ五枚胴具足と呼ばれるものです。

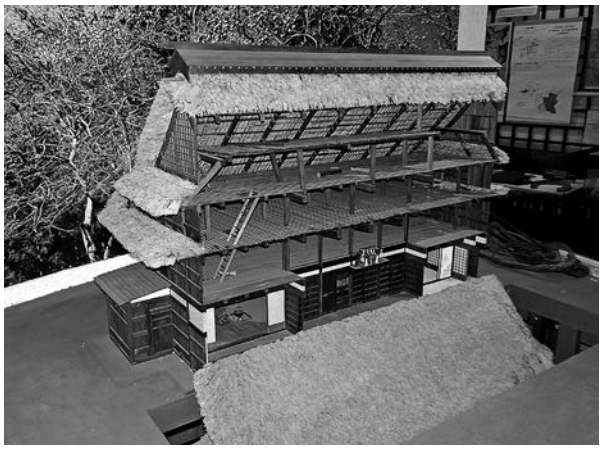
新編武蔵風土記稿にも記載されており、そこには兜鉢について文章や図絵などもかかれ、地域の古老の話でも小さい頃にかぶって遊んでいたとのことですが、現在は所在がわからなくなっています。

兜式入母屋造りの模型

その昔、数馬地域には甲州の武田氏の落人が多く移り住んだとされており、富士系民家の流れをくむ「兜造り」の家が現存しています。

兜式入母屋造模型外観

兜造りは､建物側面にある「妻」側の屋根を切り上げており、それにより屋根の形が下から見ると兜に見えることから、兜造り、檜原村全体では入母屋造が主流でそれを改造したため、兜式入母屋造と呼ばれます。このような屋根の形に新しく建てる際や改造をした理由の１つは檜原村では林業や炭焼きと一緒に養蚕を行っており、生糸の輸出需要の増加に対応するため、採光や通風を確保し蚕の生産能力を向上させるためで、檜原村では「慶長御水帳（1598 年)」に檜原の産物として「真綿」が記載され、その頃には養蚕が行われ昭和の中頃までつづいていたようで、現在も古い家には養蚕道具が多数残されています。



兜式入母屋造模型内部

日野市郷土資料館　昭和の小学校舎の思い出とともに

日野市郷土資料館　白川 未来

日野市郷土資料館の特徴

郷土資料館施設は、統合により使われなくなった旧高幡台小学校舎に平成17年度開館しました。博物館として建てられた施設ではなく、改修工事も最低限しか行っていません。教室を活用した展示室では、虫害対策や温湿度管理に困難が生じています。そのため取扱いに注意を要する資料は展示できません。また、固定の壁面展示ケースはなく、中量棚の表にアクリルをはめ込んだり、露出展示や移動展示ケースを使用しての展示を行っています。このようなデメリットを抱えながら、どのようにしたら魅力的な事業が行えるのか工夫してきました。「イチオシ」や「見どころ」と絞っての紹介ではありませんが、この場所だからこその活動が当館の個性と言えます。そんな当館での事例を紹介します。

様々なテーマを、様々な会場で展示

（1）企画展

令和４年度は３つの企画展を開催しました。当館の展示室は３教室分です。狭い展示室では常設で日野の通史を展開するのは困難なため、１教室分の企画展示室で、テーマを変えて様々な日野の姿を紹介してきました。展示資料の制約がある施設で写真や複写の活用を多くするなどの工夫をしています。

・「日野市の天然記念物」（4.2～9.4）

市内の多摩動物公園に飼育されている天然記念物の動物、日野市指定天然記念物の巨木について、実物大の樹木の拡大写真を壁面にはるなど、写真中心に紹介しました。

・「鎌倉殿の平山季重」（9.10～12.4）

日野市内の文化財や発掘調査成果、錦絵や古文書など、多角的な視点から平山季重を紹介しました。国立公文書館、都立図書館など他館所蔵史料など複写を用いて数多く展示しました。

・「ひのっ子くらし展」（12.10～3.26）

平山小学校の文集『つくし』に綴られた内容をもとに、昭和20～40年代の子どもの視点から「しごと」や「あそび」について写真、遊び道具や生活道具などで伝えます。数多く収蔵する農具や生活道具を、新鮮な切り口で資料選択しました。

「ひのっ子くらし展」より

（2）廊下壁面でのパネル展示

館内の廊下壁面では、パネル展示を開催しています。先述の企画展と同様の考えで、令和４年度は以下の多様なテーマでふるさと日野を紹介してきました。

・童謡「たきび」誕生80年
・七生丘陵散策コース　池
・明日に伝える戦争体験
・見直そう！楽しもう！真慈悲寺　～新たな瓦の発見に沸く～
・ほどくぼ小僧勝五郎生まれ変わり物語

（3）出張展示

当館は駅からバスでのアクセスとなり、日野市内でも浅川以北の地域からは馴染みのない場所です。場所が不便なため、平成17年の設置当初から公共施設などでの出張展示に力を入れてきました。令和４年度は、京王百草園、旭が丘中央公園での「たきび祭」といったイベントに合わせての展示、図書館の壁面展示スペースを用いての展示を実施しました。また、依頼があれば学校の周年行事や介護施設内でも展示を行います。

グラウンドや体育館を使っての事業

旧学校施設なので、グラウンドを使って思い切った行事もできます。どんど焼き（コロナ禍でイベントとしては休止中）、土器の焼成といった事業をグラウンドで実施できます。また、小学生の社会科見学では、体育館で動画を上映したり、グラウンドでお弁当という対応も可能です。

さいごに　思い出の小学校とともに

この建物は昭和47年から平成15年まで校舎として利用されてきました。統合前の旧程久保小学校と旧高幡台小学校の校歌や校章の彫刻などの記念作品、卒業生一同寄贈の鏡などが残されたままです。時折、廊下やグラウンドや昇降口周辺の壁面などをゆっくりと見て回っている卒業生らしき方を見かけます。声をかけると、思い出を語ってくれます。卒業生でなくても、昭和の小学校を感じていただける場所です。

日野市郷土資料館はこの建物で可能な活動は何か、この建物だからこその魅力を生かした活動は何かを考え、17年過ごしてきました。建物は老朽化し課題は山積みです。建物の「人生」とともに、今後の当館の有り方について、様々な方からのお知恵をいただきながら、模索していきたいです。

「幕末の有名人」に触れられる場所

日野市立新選組のふるさと歴史館　松下 尚

新選組のふるさと日野と「新選組のふるさと歴史館」

日野市立新選組のふるさと歴史館は、平成 17 年（2005 年）に開館した、日本で唯一の「新選組」の名を冠した公立の展示施設です。

多摩地域出身者としては全国的に屈指の知名度を誇る歴史上の人物である新選組副長土方歳三と六番隊組長井上源三郎の故郷であり、新選組局長近藤勇や一番隊組長沖田総司とも縁の深いながら、「現代人」的には立川と八王子に挟まれて多摩地区内でも地味なイメージがある日野市が「新選組のふるさと日野」を PR するために設置した博物館的な展示施設でもあり、観光施設でもあります。

新選組のふるさと歴史館には、新選組・土方歳三の人気は非常に高く、全国から入館者が訪れています。

近年では新選組を題材にしたアニメやゲームが国際的に展開されているため、外国人入館者も増加傾向にありました。2020 年以降、コロナ禍のため外国人入館者はほぼゼロでしたが、最近では再び外国人入館者が戻りつつあります。

江戸時代の息吹を感じる　分館日野宿本陣

唯一無二のイチオシは分館の「日野宿本陣」です。新選組のふるさと歴史館では、分館として「日野宿本陣」を公開しています。

甲州道中日野宿の問屋と日野本郷の名主を兼ね、新選組の支援者でもあった佐藤彦五郎が元治元年（1864 年）に建てた建物で、街道上の本陣・脇本陣としては東京都内で唯一現存する建物であり、関東地方で現存する数少ない新選組ゆかりの建造物でもあります。

分館日野宿本陣（東京都指定史跡　日野宿脇本陣跡）

彦五郎は土方歳三にとっては義兄（歳三の姉の夫）でもあり従兄弟（歳三の父と彦五郎の母が兄妹）という繋がりの深い人物で、実際に土方歳三や近藤勇が京都から多摩に戻ってきた際に数度滞在した記録があります。

都内に限らず、近藤勇や土方歳三が確実に滞在した建物というのは京都以外にはほとんど残っていないため、ファンには垂涎ものの貴重な場所といえるでしょう。ただし、歴史上の有名人の地元ではありがちなことですが、後付けで色々怪しい伝説が付加されていて、それを信じてしまう人が多いのは困ったところではあります。

ライトなファンからディープなファンまで楽しめるように

「新選組」人気は、実在した歴史上の人物・組織である「新選組」以外に、『燃えよ剣』に代表される、新選組を題材にした「創作」に支えられている面があり、非常に息の長い人気コンテンツということができます。

新選組のふるさと歴史館ではこうした「創作文化の歴史」も取り扱っています。

また、エントランスホールには記念撮影コーナーがあり、京都の屯所や函館五稜郭をバックに写真を撮ることができます。（かつては新選組の羽織や袴を着て「なりきる」こともできましたが、コロナ禍のため休止しています）

また、ここでは平成 16 年（2004 年）の NHK 大河ドラマ『新選組！』で実際に使われた「新選組屯所」の看板とも記念写真を撮ったり触れたりできます。

記念撮影が楽しめるエントランスホール

最後に　強みと課題

コロナ禍で大きく減少した入館者数も、令和 3 年末頃からはほぼコロナ前の水準に戻ってきています。

このように、日野市が新選組という強烈なアピールポイントを持っているのは大きな強みですが、逆に地元市民の関心が低いのは長年の課題で、コロナ前に実施した調査では入館者全体に占める日野市民の割合は 1 割未満に留まるという結果が出ています。

誇れる地元の大きな財産とするためにも、市外からの集客以外に、市民に関心を持ってもらう取り組みが課題といえます。

金井観花詩歌図巻

小金井市文化財センター　多田 哲

（小金井）橋の北に秋葉権現の祠あり、境内に石碑あり、
滕明夫（大久保狭南）なるもの誌せり
斎藤鶴磯『武蔵野話』文化12年（一八一五）

小金井桜樹碑
多磨川上水北側にて秋葉の社に並び建てり
『新編武蔵風土記稿』文政11年（一八二八）

小金井桜樹碑　文化７年（1810）建立
現在は海岸寺（小平市御幸町 318）門前に西に面して建つ小金井桜樹碑は、五日市街道に面して建っています。

柏屋　昭和 30 年代
小金井橋の北、現在はガソリンスタンドがある場所にあった柏屋
小金井堤の代表的花見茶屋

小金井市指定有形文化財　金井観花詩歌図巻　文政９年（1826）

三好學旧蔵。文政９年３月、越前丸岡藩主有馬誉純が江戸藩邸より家臣を伴い小金井に花見に訪れた際の紀行文・風景画・詩歌をまとめて一巻としたもの。巻頭には同行した息子有馬純佑筆の「金井観花」の題字、続いて有馬誉純自筆の紀行文、巻末には家臣や侍女らが詠んだ漢詩 16 編・和歌 22 首を載せています。武家の花見風俗や文人大名家の文学的水準の高さを窺い知ることが出来る貴重な作品です。

特筆すべきは同行した絵師伊星元雅が描いた風景画で、当時の実際の景色「真景」を描いたものです。近世の小金井橋周辺の風景画といえば歌川広重の錦絵がまず挙がりますが、そこにはとてもあり得ないほど立派な小金井橋が描かれています。それに比べて、この金井観花詩歌図巻に見る小金井橋は極めて質素な橋であり、より現実に近い描写といえるでしょう。

水神
一時、小金井橋の北にありましたが、現在は元の小金井橋の南に戻されています。

くにたち郷土文化館周辺散策のすすめ

くにたち郷土文化館　安齋 順子

はじめに

今回の『ミュージアム多摩』のテーマは「館のみどころ・イチオシ」ということで、当初、コロナ禍に力を入れて作成された動画や、収蔵資料のデータベース（甲野勇氏資料の一部）などをご紹介しようと考えました。しかし、周辺散策と合わせて訪れるとより展示の内容が楽しめるのが、当館の面白さのひとつであることから、今回は郷土文化館周辺の地域についてご案内したいと思います。（動画や収蔵資料データベースは、当館ホームページよりご覧いただけます。）

歴史を紡ぐ国立市南部地域

国立市は、都内で２番目に小さな市で、北部に JR 中央線が走り、国立駅からまっすぐ南に延びる大学通りや、その周辺の閑静な住宅街は、一般的に多くの方がイメージされる国立市の光景かもしれません。

一方で、昭和の初め頃まで、村の中心地であった南部地域には、甲州街道が東西に通り、江戸時代にはこの街道に沿って、下谷保・上谷保・青柳・石田などの村が形成されていました。谷保駅の南方向に村を代表する寺社のひとつで延喜３（903）年に菅原道真の死を三男の菅原道武が祀ったことを由来とする、谷保天満宮があります。毎年９月下旬には例大祭が行われ、万灯行列や三匹獅子舞が見ることが出来ます。ここから甲州街道を立川方面に進むと、臨済宗建長寺派の谷保山南養寺があります。境内の鐘楼は谷保の鋳物師関家により鋳造されたものです。

また、谷保天満宮から甲州街道を府中方面に進むと、街道北側に、江戸時代に下谷保村の名主だった本田家があります。歴代当主が医者や文人としても活躍した本田家には、江戸時代に建てられた主屋と表門（薬医門）が残されており、平成 28（2016）年に現当主の本田咏夫氏よりその土地と所蔵資料とを合わせて国立市に寄贈されました。現在、主屋は解体復元工事がはじまっており、残念ながら見ることが出来ませんが、立派な表門は甲州街道から目にすることが出来るでしょう。

郷土文化館では、甲州街道の模型や、谷保の鋳物師が使用した型、谷保天満宮の祭礼道具、本田家の日記や 13 代当主本田定年の揮毫した幟旗などの資料をみることが出来ます。

くにたち郷土文化館周辺 MAP

崖線と周辺の自然

国立市には、北から国分寺崖線・立川崖線・青柳崖線の３つの崖線があります。立川崖線から湧き出る水からなる矢川は、全長約 1.3 キロで、川の脇を散策すると今も生活に使われた“洗い場”があり、地元の人が野菜を洗う姿を目にすることがあるかもしれません。この矢川は、日本で初めての知的しょうがいしゃのための福祉施設である滝乃川学園（昭和３年に巣鴨から谷保村に移転）の園内を通り、青柳崖線を下って最後は府中用水と合流します。崖線周辺は緑が多く残り、鳥や昆虫など多くの生き物をみることができます。

郷土文化館の展示室では、国立の地形を表す模型があり、また郷土周辺に生息する鳥類の剥製展示を見ることが出来ます。

以上、簡単ではありますが、ぜひお天気の良い日に郷土文化館周辺地域の散策をしながら、郷土文化館に出向いていただければ幸いです。

矢川

国立市古民家前の田んぼと崖線の緑

旧日立航空機株式会社変電所について

東大和市立郷土博物館　中山 寛文

無数の傷跡が残る旧日立航空機株式会社変電所

1．はじめに

郷土博物館の南方、およそ３キロほど離れた都立東大和南公園の中に、旧日立航空機株式会社変電所は建っています。外壁に無数の弾痕が残るこの建物は、戦争の悲惨さを伝える貴重な建造物として、東大和市の文化財に指定されています。約１年をかけた保存改修工事が令和３年夏に終了し、同年10月から定例一般公開を開始しました。全国から多くの見学者にご来場いただいているほか、授業に活用されるなど幅広い活躍をしています。東大和市立郷土博物館のイチオシとして、旧日立航空機株式会社変電所をご紹介します。

2．変電所の沿革

昭和13（1938）年、人口5,000人ほどの小さな農村だった大和村に、東京瓦斯電気工業株式会社によって軍需工場が建設されました。航空機のエンジンを製造するこの工場は、昭和14（1939）年合併によって日立航空機株式会社立川工場となり、操業しながら拡張していきました。昭和19（1944）年には従業員数が約13,000人を超え、社宅などを含めた総面積は57万坪を超えるという巨大工場になりました。工場だけでなく社宅や寮、スポーツ施設や映画館などの福利厚生施設も数多く建設され、東大和の発展に大きく貢献しました。変電所は巨大な工場内に電気を分配する重要な役割を果たすため、この場所に建設されました。

太平洋戦争末期の昭和20（1945）年、工場は米軍による空襲を受けます。２月17日、４月19日・24日の計３回の攻撃によって、従業員や動員されていた学生をはじめ、社宅に住む人たちなどあわせて111名の尊い命が失われました。工場も８割近くが壊滅する甚大な被害を受けましたが、変電所や給水塔は多くの傷跡を残しつつ、奇跡的に倒壊を免れました。その後は機械を別の場所に避難させた疎開工場で生産を続け、８月の終戦を迎えました。

3．戦後の変遷

終戦後、日立航空機株式会社はＧＨＱの命令により解散されました。工場は後継企業によって平和産業に転換され、社名変更を重ねながら操業を続けていきます。変電所や給水塔は内部設備の更新をしながら、外壁に無数の弾痕を残した状態のまま使われ続けました。平成５（1993）年、新施設の稼働に伴って変電所はその役目を終え、平成６（1994）年に東大和市が無償でもらい受けることとなります。当初は取り壊される計画でしたが、かつて工場で働いていた方や市民団体の働きかけによって、都立公園内に残されることが決まったのです。一方で、変電所と同様に残されてきた給水塔に関しては、残念ながら取り壊されることとなりました。役割を終えた給水塔は、平成13（2001）年解体工事が行われましたが、弾痕の残る壁面の一部を切り取って変電所の脇に移設しました。

4．文化財としての活用

平成７（1995）年、東大和市は変電所を市文化財に指定し、同年１回目の保存・改修工事が行われました。令和２（2020）～令和３（2021）年には老朽化などに対応するため、２回目の保存改修工事が行われました。この工事費の一部には多くの方から寄せられた当市へのふるさと納税による寄附金の一部を活用させていただきました。工事を終え、新型コロナウイルスの感染拡大も比較的収まった令和３年の10月、週に２回の一般公開を開始しました。弾痕がはっきりと残る外壁を間近で見ることができるだけでなく、内部にはパネルや模型なども展示されており、工場の沿革や当時の様子を詳しく学ぶことができます。また、階段の補強工事を行ったため、それまで見ることができなかった２階にも立入ることができるようになりました。市内の方だけでなく、近隣市や遠方から見学にいらっしゃる方も多く、公開開始後１年間で1,500人以上の方に来場していただきました。戦争の恐ろしさを身をもって感じることができる貴重な建物として、一般の見学者だけでなく市内外問わず様々な学校の授業にも、頻繁に活用されています。工場の存在を初めて知ったという見学者も多く、東大和市の歴史を伝える重要な役割を果たしています。

一般公開は年末年始を除く毎週水・日曜日の午前10：30～午後４時に行なっています。ぜひお越しください。

空襲後の工場の様子

パルテノン多摩ミュージアムのリニューアル

パルテノン多摩ミュージアム 橋場 万里子・仙仁 径

パルテノン多摩ミュージアム（旧・歴史ミュージアム）は、大規模改修事業を経て 2022 年にリニューアルしました（３月プレオープン、７月グランドオープン）。

●コンセプトは「地域まるごと博物館」

大規模改修では、常設展の固定化、バリアフリー未対応など従来の課題を踏まえ、「学芸員やボランティアの活動の起点」「フレキシブルな展示」「近隣との連携」などを実現することが求められました。改修では展示スペースが減少しましたが、多摩ニュータウンや多摩市には多数の資料や情報があり、街並みそのものも重要な資料でもあることから、エコミュージアム（地域まるごと博物館）の考え方を取り入れ、「まちへの入口・ハブ」という位置づけでリニューアルを進めることになりました。

●市民学芸員によるテーマ検討と企画実施

地域まるごと博物館では、単に街全体をフィールドとするだけではなく、市民が主体的に参加してミュージアムと地域をつなげる活動を通じて、地域への理解や愛着を深める過程そのものが重要です。そこで、計画作成段階から「市民学芸員」を募集し、一緒にミュージアムのテーマを考えていきました。WS でまとめられた４つのテーマ「わたしたちのまち多摩の、環境と人々のいとなみの変容を探り、地域の記憶を継承する」「多様なふるさとの共有（さまざまな背景を持つ人が互いに理解しあう社会包摂の場）」「谷戸のくらしと多摩ニュータウンの過去・現在・未来～再発見と発信のひろば～」「結ぶ・つながる・広がる／みんなが主役／まちの入口／どこでも博物館」は、ミュージアムの構想にも取り入れました。開館後も、市民学芸員による企画や調査活動は続いています。

●参加できる「まちの情報ステーション」と「ミュージアム・エンジン」

展示の冒頭には「まちの情報ステーション」を設置しました。定期的にテーマを設け、来館者がブラックボードに地域情報を記入し、情報交流の場にしています。奥には書籍閲覧や PC 検索、市民の調査研究や市民学芸員の会合ができる場を設けました。ここはミュージアムの原動力という意味で「ミュージアム・エンジン」と名付けました。

●展示における３つの軸と可変的な展示・多言語化への対応

展示では多摩ニュータウンの形成に至る過程を、「大地のかたち」「都市近郊農村の歴史とくらし」「多摩ニュータウン開発による変化」という３つの観点から、動画コンテンツによるオーラルヒストリーも加えて展示をしました。

展示更新がしやすいシステム壁や入れパネ、移動式展示ケースを導入したほか、文化庁による「博物館等の文化施設インバウンド強化事業」補助金を申請し、パネル・リーフレット・スマホアプリの多言語化をおこないました。

●展示における人文科学と自然科学の融合

当館では植物観察会を長年開催し、自然史標本など自然史情報・資料の蓄積がありますが、リニューアル前はおもに地域の歴史を展示しており、それらを常設展示に反映できていませんでした。また、多くの博物館では人文科学と自然科学のコーナーを分けて展示していますが、当館の展示テーマである地域の変遷では両者がさまざまな形で関わっています。そこでリニューアルを機に人文科学と自然科学を融合させた展示を試みました。「大地のかたち」では、地形や地質の解説に加え、谷戸地形が多摩ニュータウンの風景を形成したことを紹介しています。

●デジタル対応

当館ではデジタルアーカイブや「定点撮影プロジェクト WEB ギャラリー」など、以前からデジタル化をおこなっていましたが、色々と変更が必要な状況になっていました。また新型コロナの影響によりデジタルコンテンツの充実が求められていました。そこで、リニューアルを機に①クラウド型のデジタルアーカイブ再構築、②展示解説用スマホアプリの導入、③ミュージアム WEB サイト構築をおこないました。③はデジタルアーカイブの情報をミュージアムの端末で簡単に調べられるようにしたサイトです。データ入力は道半ばですが、引き続きデジタルアーカイブの利便性を高めていきたいと思います。

●今後の課題と展望

このようにしてミュージアムはオープンしましたが、市民参加の方法、地域連携、データーベースや展示内容の充実など、多くの点で模索中です。ミュージアムに市民がかかわり、地域とつながりながら地域文化を理解し発信していく流れを大切にしながら、ミュージアムを成長させていきたいと考えています。

東京農工大学科学博物館内における学生活動の再開

東京農工大学科学博物館　齊藤 有里加

2022年度は学生との連携強化を目標に博物館活動を再開

東京農工大学科学博物館は2022年12月より開館業務を再開しましたが、博物館事業の活動再開は十分ではありません。本年度は長く大学生活に制限のあった学生たちに活気を取り戻してもらいたいと思い、学生関連の博物館活動の再開に注力しながら活動開始いたしました。

新入生への博物館見学と歓迎展示の実施

新入生オリエンテーションの授業の一環で、博物館の館内解説に加え、繊維学関連の学校であったという由来を感じてもらうためにワタの種子の配布を実施しました。またサークルの新入生勧誘が難しい状況であるため、各サークルのポスターによる新入生へのメッセージコーナーを作るなど新入生歓迎展示を行い、博物館を通して少しでも大学の歴史や普段の学生生活を伝えられるように工夫を行いました。

学芸員実習生によるイベント企画と対面解説の再開

学芸員実習では、来館者への対面での解説活動ができるようになったことから、対話を想定したサイエンスコミュニケーションを企画してもらいました。本博物館が収蔵する植物学教育掛図の内容を元に、「掛図班」「有用植物班」「種子班」「生存戦略班」「野菜班」「顕微鏡班」の6班が対面、非対面の両方の場合を想定したブースを作り、8月のサマーフェスタにおいて来館者への対面での解説を実施しました。その後はブースを展示コーナーに変えて、夏休みの「植物学教育掛図展」の一部として公開しました。

学生企画中心で実施した「サマーフェスタ」

博物館支援学生団体musset（ミュゼット）の活動再開

コロナ禍での活動制限以降、動画の公開やSNSでの発信などの活動をしていたmussetですが、2022年度より活動を再開し、（1）新入生歓迎展示での博物館案内パネル作成（2）博物館イベント「サマーフェスタ」でのサイエンスイベントの実施（3）独立行政法人科学技術振興機構主催「サイエンスアゴラ」での企画実施（4）博物館での各種研修活動の実施（5）博物館内展示制作を行いました。学生たちにとって久しぶりの博物館での活動となりました。本年度は今までの企画を再度実施することで、運営体制の確認や研修を実施し、コミュニティの強化に力を入れてきました。また、博物館内での活動内容を増やし、これからの活動内容について模索しています。

サイエンスアゴラ「ppmを体感しよう～ペットボトル

博物館交流事業となった「＃ワタを育てて機械を動かそう」

新入生オリエンテーションにて配布したワタの種子を、来館者や学内関係者にも配布したことをきっかけに、SNSで成長記録の発信や近隣園（協力：江戸東京たてもの園）との交流が始まりました。試行錯誤を経て育てたワタは8月に開花し、11月には収穫しました。12月20日のワタ繰りワークショップでは、学生や留学生、一般来館者、近隣博物館関係者といった多様な参加者が集まり、育てたワタを綿繰り器にかけ、梳綿機（そめんき）でさらにワタをひらく様子を見て、体験してもらいました。

学生とワタを収穫する様子。博物館でのワタ栽培では支援組織（友の会・技研・musset）に協力いただきました。

おわりに

大学博物館の魅力の一つに「学生の活動の場」であることが挙げられます。学生たちにとってのサード・プレイスの役割として、学生時代は社会との接点の場、卒業してからはOGBとして大学に立ち戻り、親しんでもらえる場としての機能が期待できます。コロナ禍を超えて学生たちが新たに取り組み始めた連携企画をこれからも進めていきたいと思います。

見どころいっぱいの建物

江戸東京たてもの園　阿部 由紀洋

江戸東京たてもの園は

両国にある江戸東京博物館の分館で、1993年（平成５）３月28日に開園した野外博物館です。2023年（令和５）は、開園から30年という節目となります。園内には30棟の復元建造物が建ち並び、１棟をのぞいて実際に東京都内で使われてきた、文化的に価値の高い歴史的な建物を移築復元しています。園内は西・センター・東の３つのゾーンに分けられ、西ゾーンには住宅や茅葺きの民家、東ゾーンには商店建築、センターゾーンには「ビジターセンター（旧光華殿）」や「高橋是清邸」など、歴史の舞台となった建物を配置しています。園の敷地が東西に長い地形であることから東京の地形に見立て、園内東側が下町の商店街、西側が山の手の住宅地のような配置となっています。

情景を再現する展示

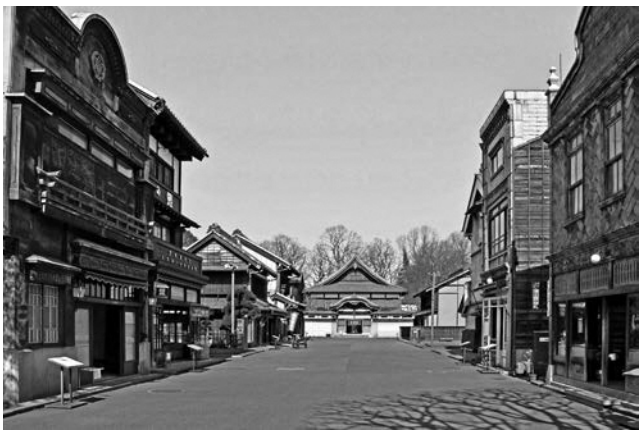
建物は創建時の姿に可能な限り復元し、室内は家具類を置いて、その建物での暮らしぶりがよくわかる年代を設定して展示しています。私たちはこの室内の展示を「情景再現展示」と称しています。情景再現展示は、居住者への聞き取り調査のほか古写真や類例調査などをもとに年代設定をするため、建物それぞれにふさわしい年代設定となり統一されていません。そして、情景を再現するための展示物、「演示品」は、建物と一緒に居住者からご寄贈いただいたもののほか、調査結果をもとに類例品を購入したり新規に製作してそろえたものです。中には、実物資料を複製して展示しているものもあります。このようにして室内空間を再現していますので、建物内は原則として入室可能としています。開園当初、建物の内部に調度類や日用品などを置いて生活感を演出して公開するという博物館は、あまりなかったのではないかと思います。

「鍵屋（居酒屋）」情景再現展示の様子

個性豊かな建物たち

現在、園内には30棟の建物が移築され公開していますが、それぞれに見どころがあり、どれもがイチオシになり得る建物ばかりです。例えば西ゾーンにある「田園調布の家（大川邸）」。その名のとおり大田区田園調布に1925年（大正14）に建てられた住宅で、いわゆる平屋ですが、内部は居間を中心に食堂や寝室、書斎が配置され、家族が集まる空間を中心に配した間取りは、現代にも通じるとてもモダンな建物です。また茅葺きの民家の「綱島家」は、江戸時代中期に建てられた民家で、屋根の軒は手が届きそうなほど低い造りとなっています。内部は土間と板の間が半分以上を占め、天井もほとんど張られてなく屋根の裏側や梁や桁などが組み合わさっている様子が見られます。

一方東ゾーンでは、現在数が減り続けている銭湯の「子宝湯」（1929年築）を中心に、さまざまな商店が建ち並びます。子宝湯は、お寺のような外観と、番台や浴室のペンキ絵など、これぞ東京の銭湯といった趣です。そしてこのエリア内に建つ６棟の「看板建築」はまさに個性派ぞろいで、建物の前面に銅板やタイルを張ったり、モルタルを塗ったりするだけでなく、それぞれ思い思いにデザインされ、人目を惹く建物となっています。まさに立て看板のような見た目です。看板建築は1923年（大正12）の関東大震災の後に建てられた木造の商店建築で、前面に銅板などを張るのは、火災に強い建物とするための工夫とされています。このような建物を移築保存しているのは、全国の建築系の野外博物館でも当園だけです。近年、都内の看板建築は数を減らしているので、とても貴重な建物となりつつあります。



子宝湯（中央）と看板建築（手前）

このほか、1936年（昭和11）の二・二六事件の現場となった「高橋是清邸」（1902年築）や財閥解体後の三井同族十一家の総領家の邸宅「三井八郎右衛門邸」（1952年築）、建築家の前川國男の自邸（1942年築）や堀口捨己が設計した「小出邸」（1925年築）など、バラエティに富んだ建物を保存公開しています。

情景を再現する催事

当園では、これらの建物が建ち並ぶ様子を街並みとして活かす、様々な催事を実施しています。商店が並ぶエリアでは、子供たちがお使いの体験をしたり、夏祭りの会場にもなります。また、建物のあかりや囲炉裏や暖炉などの火のぬくもりを感じていただく夜間開園など、四季折々に様々な姿を楽しんでいただけます。コロナ禍で、建物や街並みを活かした催しが十分に実施できていない状況ですが、知恵と工夫で、見どころを増やしていきます。

地域資料としての「包装紙」

たましん地域文化財団 歴史資料室　山田 兼一郎

はじめに

歴史資料室では、多摩地域の歴史資料を収集・整理して「資料検索システム」や「デジタルアーカイブ」を活用しながら所蔵資料の利用・公開を進めている。しかしながら、すべての所蔵資料を各システムに搭載できているわけではない。そこで、これまで披露する機会の少なかった包装紙コレクション（約2,000点以上）を「みどころ・イチオシ」として紹介したい。

三多摩の銘菓　飛行煎餅の熨斗紙

立川市曙町（現在の立川駅北口フロム中武あたり）にあった元木屋菓子舗で販売されていた飛行煎餅の熨斗紙である。熨斗には商品名として「立川名産　飛行煎餅」と記されており、同梱されていたであろう「飛行せんべいの栞」によって昭和40年頃に使用されていた包装紙だと推測できる。商品名は「空の都」と唄われた立川を象徴する立川飛行機に由来するもので、栞には「飛行機の歴史と共に、この飛行せんべいも又永い間大方のお茶の友として親しまれて参りました」とある。近代立川の歴史や街の発展に大きな影響を与えた飛行場が地元商店の商品デザインに反映された郷土銘菓ならではの包装紙である。

○□堂書店のブックカバー

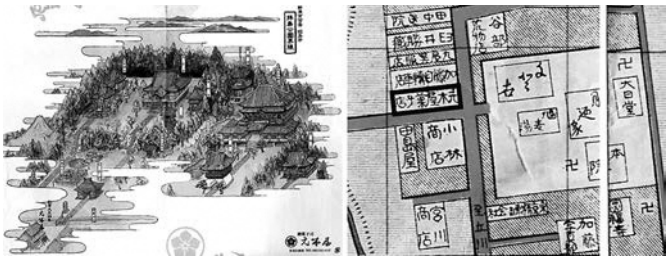
次に立川町仲町（現在の立川駅北口三井住友銀行立川支店あたり）へ店を構えた○□堂書店のブックカバーを紹介する。「○□堂」という独特な店名に関心が向くかもしれないが、注目すべきは「多持」のサインである。この○□堂書店ブックカバーのデザインを手掛けたのは国分寺市出身の日本画家・佐藤多持で、同氏は多摩地域の芸術・美術界を牽引した地域ゆかりの作家である。○□堂書店は昭和5（1930）年発行『最新実測 立川町全図』（註1）に町内の著名な営業店舗として名を連ねており、「飛行隊御用達」という広告フレーズからは地元でも有名な老舗書店であったことが想像できる。佐藤と○□堂の関係性は不明ながら、地域ゆかりの画家と老舗書店のコラボレーションによる包装紙は地域資料としても興味深い1点になるのではないだろうか。

立川駅北口にあった元木屋（左）と○□堂書店（右）の包装紙

拝島の老舗「御菓子司 元木屋」の包装紙

大正3（1914）年創業の老舗・元木屋は現存する市内でも有名な和菓子屋である。当室所蔵の包装紙は元木屋から平成11（1999）年に購入した商品の包み紙なので、包装紙そのものは現代に使用されていたものである。

包装紙は新東京百景（昭島市）に選ばれた拝島公園が主なデザインで、園内に所在する日吉神社（拝島村の総鎮守）、大日堂、拝島大師など名所・旧跡と元木屋が描かれている。拝島公園から拝島分水を隔てた場所に店を構える元木屋は、大正13（1924）年発行『大日本職業別明細図ノ内』（註2）にも描かれており、周辺地区の社寺や文化財・史跡と並んで地域の歴史文化的景観を形成する商店と言っても過言ではない。このような歴史ある地元商店の包装紙を収集していくことも近現代史資料をアーカイブする機関にとって必要なことではないか。



元木屋の包装紙と同店が掲載された明細図

さいごに

当室が「包装紙」と呼ぶ資料群は、パッケージデザインや広告デザインなどの美術・デザイン系の学問・研究領域で論じられてきた。しかし、ここで紹介したように見方を変えれば「包装紙」は地域資料として活用できる可能性を秘めており、とくに日々移り変わる街の変化を物語る資料となるのではないか。

我々が日頃から訪れたり、通勤や通学で目にする商店は店舗や建物が無くなってしまうと、「ここにあった店何だっけ？」となってしまうほど生活にとけ込んでいる。この記憶を思い起こさせる効果も「包装紙」には期待できるのではないだろうか。

またデザインに関して、○□堂書店のように地域ゆかりの芸術家や文士たちを起用した点に注目すれば、地域の近代「美術」「文学」といった分野からの検証も可能ではないか。

「包装紙」の学術的な評価や歴史資料としての位置付けに関しては、より詳細な調査・研究を進めなければならない。それでも、小稿から「包装紙」を地域資料としてアーカイブする魅力や面白さの一端を感じていただければ幸いである。

※（註）の資料は当財団デジタルアーカイブで公開中

展示！体験！庭園！

東京都立埋蔵文化財調査センター　塚田 清啓

はじめに

東京都立埋蔵文化財調査センターは、多摩ニュータウン（以下、TN）遺跡群を中心とする出土資料の保存と活用を図り、広く都民の文化的向上に資するため昭和 60 年（1985）に開設された施設です。館の 2 階は一般公開しており、収蔵資料の一部を展示ホール等で見学できるほか、昔の技術を体験できるコーナーもあります。また、館外に出れば併設する遺跡庭園を自由に散策することができます。本号では、当館の展示･体験･庭園のみどころとイチオシを紹介します。

展示ホール

展示ホールはエントランスに入って左手にありますが、まず目に飛び込むのが、各年度で開催する企画展示の大看板です。毎年、当広報学芸担当職員がTN遺跡群の膨大な量の出土資料からテーマに沿ったものをピックアップし、展示ホール中央のスペースに特別な造作を設けて出陳する展示がみどころです。

一方、展示ホール壁側を周回するように設けた常設展示も見逃せません。ここにも TN 遺跡群の旧石器時代から江戸時代の出土資料から選りすぐりの逸品を陳列しており、順を追って TN の歴史の学習に役立てるようにしています。この常設展示の中で特にイチオシは、なんといっても展示ホール入口の両側に鎮座する TNNo.471 遺跡出土の土偶（通称「多摩ニュータウンのビーナス」）と TNNo.72 遺跡出土土器の装飾部（通称「丘陵人の肖像」）です。書籍や雑誌等で取り上げられることが多く、世に広く出ている実物を間近で見ることができます。

エントランス（左：展示ホール入口、右：企画展示大看板）

体験コーナー

体験コーナーは、エントランスの大看板より右手に進んだ場所にあります。複製の縄文原体や竹管・貝殻等を用いた文様付け体験、紙と鉛筆で土器の文様を写し取る体験、織物技術体験、火おこし技術体験などができる各コーナーを設置しています。中でも人気があるのは、立体土器パズルです。実際の遺跡調査では、出土した土器片を組み合わせて土器本来の形を復元する作業が行われますが､それを疑似体験できる模型となっており、子どもから大人まで幅広い年代層に好評いただいています。また完成させた土器の形をよく覚え、体験コーナーの先にある特別収蔵庫前に進むと、パズルのモデルになっている本物の土器を探して確認することもできます。

立体土器パズルと各種体験コーナー

遺跡庭園「縄文の村」

遺跡庭園「縄文の村」は、展示・体験が見学できる建物屋外に隣接しています。TNNo.57 遺跡を保存しつつ整備し、昭和 62 年（1987）に開園したこの庭園には、復元住居 3 棟や発掘時の状況を再現した住居跡の模型が設置されています。また、庭園内に生えている植物は、約 5,000 年前の縄文時代中期に生えていたと考えられる 50 種類以上の樹木や野草が植えられており、復元住居と合わせて当時の生活様相が窺えるように景観を復元しています。また、復元住居内で不定期に実施している火焚き日（スケジュールは HP に掲載）に合わせて来場すると、より一層縄文時代にタイムスリップしたかのように感じられる所がみどころです。

遺跡庭園「縄文の村」の復元住居

おわりに

当施設は、東京都埋蔵文化財センターが昭和 41 年（1966）から 40 年かけて 770 箇所の TN 遺跡群を調査してきた出土資料・記録類を収蔵しており、過去の調査より蓄積してきた知識･経験等の実績を有する同センターが指定管理者として管理･運営しています。そこから生まれる展示はもちろん、年間行われる様々な行事に当センターの強みと特色が小規模ながらも凝縮されています。我々はこれからも都民の文化的向上に資するため、魅力的なみどころやイチオシを発信していきます。

多摩六都科学館の「大人向けプラネタリウム」

多摩六都科学館　柴崎 勝利

多摩六都科学館概要

多摩六都科学館は世界最大級のプラネタリウムドーム（直径27.5m、定員234名）を有する総合科学館である。2012年７月にリニューアルしたプラネタリウムの投映機は㈱五藤光学研究所製のCHIRON Ⅱ（ケイロン２）で、2022年11月までは映し出せる恒星の数が世界一であった。今なお素晴らしい星空を提供しており、多くの方にお楽しみいただいている。

プラネタリウム番組は一般向けの投影と平日学校向けの学習投影の他に、３年ほど前から「大人向けプラネタリウム」というコンテンツを開催し（夏休みは休止）、好評を得ている。番組テーマは担当者に一任され、最新天文情報から人文分野と絡めたものまで多様なテーマで展開している。

「大人向けプラネタリウム」の人気

一般投影の中で伝えきれていない事項の追加や、星空を眺める時間を通常よりも長めに設定するなどして、大人に見応えのある内容にしたのが当館の大人向けプラネタリウムである。対象は中学生以上で、中高年の入場者が多い。タイトルや内容だけでなく、今年度からは通年で組んだスケジュールを広報した効果もあり、利用者も増え、昨年度よりも反響が大きかったように思える。

ここからは私見となるが、この数年、一般的にプラネタリウム番組はアニメやキャラクターを主としたものが増え、多くの館で大人離れの傾向を否めないと聞く。大人の間には「プラネタリウム＝子どもが観るもの」という認識が定着し敬遠されがちで、中学生でさえプラネタリウムは子どもっぽいと避けていると聞いたことがある。アニメ番組は子どもが科学への興味を持つ一助という理由も妥当に思えるが、その後最も科学に親しむべき時期に、科学から遠ざかってしまっては本末転倒と言わざるを得ない。

通年の予定を載せたチラシの発行により利用者が増えた

デジタルプラネタリウムの可能性

プラネタリウムはこの数年で大きく進化し、今までの星を見るだけの場所から変貌している。平たく言えばPCから出せるものは全て映せるようになった。様々な波長で観測した天文データはもちろん、各惑星の詳細な映像、数百光年以内の恒星位置データなどなど、種類に限りが無い。デジタルプラネタリウムにバンドルされているDigital Universeは、NASAのバックアップのもとでアメリカ自然史博物館（American Museum of Natural History, AMNH）が中心となって1998年よりメンテナンスを続けている世界最大規模の３次元宇宙モデルデータセットである。このデータセットの強みはユーザーがカスタマイズ出来るだけでなく新たにデータを増やすことが可能なため、常に最新の情報を、それぞれの科学館が独自の切り口で発信できることである。近年の宇宙の観測成果はすさまじく、目を見張るものがある。それに呼応するよう大衆の宇宙に対する興味や関心も高まっている。これらの期待に応える意味でも「大人向けプラネタリウム」の場で、最先端宇宙観測の投影を行うことは打ってつけと考えている。

まとめ

当館での取り組みは未だ種を蒔く段階である。需要があるように見えてもそれはごく一部に過ぎないが、今後科学館の果たすべき役割は益々重要さを増すと考えられる。

国立ハンセン病資料館のみどころ・イチオシ

国立ハンセン病資料館事業部・事業課　吉國 元

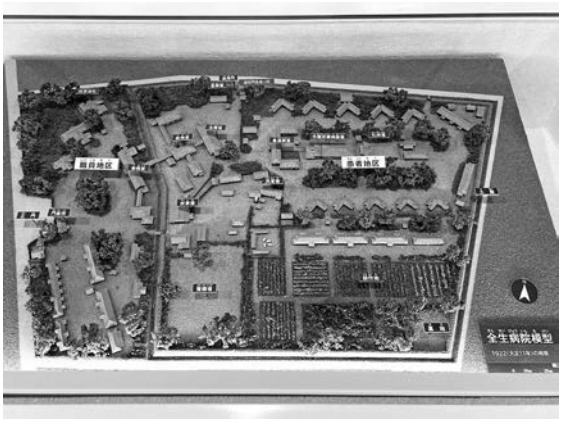
当資料館は、ハンセン病患者・回復者とその家族の名誉回復を図るために、ハンセン病問題に関する正しい知識の普及および、ハンセン病に関する偏見・差別の解消を目指して設置されました。くわえて、ハンセン病回復者が自ら資料収集、展示、社会啓発を実践してきた経緯を持つ博物館施設としても知られています。

「みどころ、イチオシ」は３つあります。まず立地です。当館は、清瀬駅、久米川駅からそれぞれバスで約 20 分、秋津駅、新秋津駅からは徒歩約２０分の場所に位置しています。都心から離れ、比較的遠方にあるのは、当館がハンセン病患者・回復者を社会から隔離することを目的に作られた国立療養所多磨全生園（開院当時は第一区府県立全生病院）に隣接しているからです。現在、同園を含む全国 13 か所ある国立ハンセン病療養所は、そこに暮らす回復者などに対して然るべき医療・福祉を提供する施設ですが、かつては先の理由で、地域の中心部から離れた僻地や、本土から離れた島などに建てられました。この歴史を念頭に置いていただくと、当館に向かう道すがら、遠方にある立地から、国が行ってきた隔離の意図を感じることが出来るでしょう。

次の「みどころ、イチオシ」は、隔離政策の始まりから、療養所の現在までを中心にまとめた、当館の常設展示室１～３です。

展示室１は導入部にふさわしく、天窓からの自然光が差し込む開放的なスペースで、ハンセン病の基本となる情報と、ハンセン病問題に関する歴史を概観します。

特にご覧いただきたいのが、1922（大正 11）年の全生病院を俯瞰する 750 分の１の模型です。この模型によって、療養所の中で「養鶏」、「養豚」、「耕作」などが行われ、さらに「患者地区」とされる場所の周囲には「土塁と堀」が作られたことなどが判ります。



全生病院模型

これらの仕組みについて、具体的に説明をしているのが展示室１の向かいにある「多磨全生園の今とむかし」のコーナー及び、展示室２です。まず前者の多磨全生園の昔を伝える写真によって、土塁と堀は入所者の「逃走」防止を目的に作られ、患者側から見ると土塁の高さは約２メートル、その外側の空堀の深さも約２メートルあったことを伝えています。

続く展示室２は、戦前の男子独身軽症者寮の様子を再現した「山吹舎」のジオラマ、鍬や大鋸などの実際に使われていた様々な道具、義足などの自助具、写真、及びそれらを説明するパネルなどがあります。これらによって、先に見た養鶏、養豚、耕作などが、患者が担わされた強制労働であり、過酷な環境に置かれた患者の苦難を知ることが出来ます。

展示室３では、まず日本国憲法の基本的人権の尊重と、化学療法の治療薬であるプロミンの導入に基づいた、隔離政策の改正をもとめた「らい予防法闘争」をはじめとする運動について紹介しています。ここでは当時の様子を記録した写真や、闘争を牽引した「全患協」の旗を展示しています。続いて、それぞれの入所者の固有性を証明する、文芸、音楽、彫刻、作陶、写真、及び絵画など、多岐にわたる芸術活動をご覧いただきます。そして特にご視聴いただきたいのは、これらの表現活動に関する証言をまとめた映像です。ここでは視覚障害のあった入所者で結成された「青い鳥楽団」のリーダー、故・近藤宏一さんによるハーモニカの演奏を聴くことが出来ます。

展示室３の証言コーナー　ハーモニカを吹く故・近藤宏一さん

展示室３の後半では、証言映像のコーナー、世界におけるハンセン病をめぐる状況、現在の日本の療養所の位置と入所者数を示すパネルなどをご覧いただきます。ここでは特に、入所者の肉声を収めた証言映像に耳を傾けていただきたいと思います。

最後に、年におよそ１，２回開催される当館の企画展もお見逃しのないようご覧ください。企画展は常設展示室においては取り上げられていない、あるいは充分展開されていないテーマなどについて掘り下げ、より多角的にハンセン病問題について展示する仕組みとなっています。

2022 年には、障害を補う道具をまとめた企画展「生活のデザイン　ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具の使い手たち」（2022 年３月 12 日―2022 年８月 31 日）を開催し、続いて 2023 年には合同詩集『いのちの芽』を特集する「ハンセン病文学の新生面　『いのちの芽』の詩人たち」（2023 年２月４日～５月７日）を開催します。

以上の３点が、私が考える「みどころ、イチオシ」です。ご来館いただいた後は、出来れば周囲の方へもご覧になったことや感想などを伝えていただければ幸いに思います。

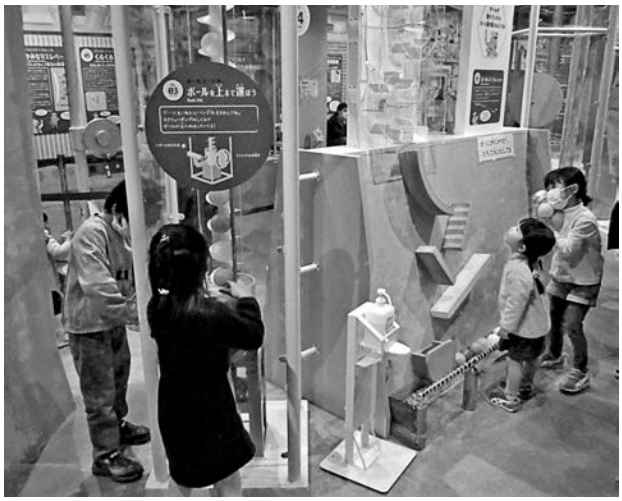
未就学児も楽しめる体験型展示「遊びカガク」

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館）　森 融

当館の展示物は市制100周年を記念して平成29年7月に全面更新しました。更新にあたっては、平成元年のオープン以来の展示物の問題点「プラネタリウムがあるが宇宙に関する展示が無い」「来館者に未就学児を含めた小さいお子さんが多くなっている」「館近くの浅川から発掘された230万年前のハチオウジゾウの化石のさらなる活用」などをピックアップし、当初からの展示物も一部残しながらリニューアルしました。ほとんどが自分で動かす体験型の展示であることは変わりません。

１階は未就学児も楽しめて、かつ物理現象を再現する展示「遊びカガク」です。一番人気はボールコースターで、ハンドルを回してボールを上のレールに上げると、高いところからレールを転がって、最後は自分で作るウレタンブロックのコースを落ちて戻って来るというものです。お子さんはボールを入れてはハンドルを回すのをエンドレスで繰り返すので、親御さんから「子どもが帰ると言わない。」という苦情？を時々いただきます。驚くことに２歳のお子さんもこの手順がわかるようで、一心にボールを入れたりハンドルを回したりしています。

ボールコースターは位置エネルギーから運動エネルギーへの変換という物理法則に基づいています。また、展示物のクルクルコプターは回転の作用と反作用、まわる広場は地球の自転のコリオリ力の実験なのですが、子どもたちにとってそんなことは関係ありません。元気いっぱいに飛び回っています。学校で習うようになって、思い出してもらえば・・と思っています。



ボールコースター

２階は小学校高学年以上を対象としており、国際宇宙ステーションの１/10模型と宇宙飛行士のミッションに挑戦するシミュレーター、小惑星探査機はやぶさのシミュレーター、四次元デジタル地球儀ダジック・アース等「地球・宇宙・未来」のコーナーと2001年に近くの浅川河川敷から発掘された230万年前のステゴドン属の象・ハチオウジゾウの化石（レプリカ）、約200年前に落下した八王子隕石の「八王子を知ろう」のコーナー、電子顕微鏡室です。リニューアルオープン後、四次元デジタル宇宙ビューワーMitakaを市内の東京八王子ロータリークラブから寄附をいただき、２階へ設置しました。

国際宇宙ステーションのミッションに挑戦では３チームにわかれて国際宇宙ステーションに滞在する宇宙飛行士などのミッションをこなすというものです。３つのミッションがあり、Ｈ２ロケットの打ち上げミッションでは、種子島の発射場チーム、筑波の管制所チーム、宇宙ステーションの宇宙飛行士チームになって、それぞれのミッションをおこないます。

国際宇宙ステーション1/10模型と
ミッションに挑戦

はやぶさのシミュレーターでは「打ち上げ」「地球スイングバイ」「小惑星イトカワへのタッチダウン」「通信途絶からの回復」「カプセルの大気圏突入」の５つのミッションを体験できます。

ダジック・アースは地球や惑星などを直径1.3メートルの球に立体的に表示するものです。雲の動きや、私たちが普段は見ることができない月の裏側や津波の伝わり方、約300年前の地球儀などを球の形に立体的に見ることができます。

Mitakaは宇宙のどこへでも行くことができるシミュレーターで、地球からどんどん遠ざかって、観測することができる限界の138億光年先まで見ることができます。

ここまでは展示物について紹介しましたが、当館でお客様向けの大きな柱は大きく３つ、展示物、プラネタリウム、そして工作教室です。

プラネタリウムでは平日の午前には幼稚園・保育園向けに幼児番組、小学校３年生、４年生、６年生番組、中学校番組を投影、平日の午後と土日祝には幼児向けから大人向けまで多様な番組を投影しています。

新しくなった展示物やプラネタリウムにより、市内だけではなく、市外からも多くのご家族や団体にご利用いただいています。団体の遠足などの計画で雨天時の代替プログラムとしての来館も歓迎しています。雨天時にご利用の場合は１カ月前から予約を受け付けています。

最後の柱の工作教室については、毎週土日や学校の長期休業期間にはほぼ毎日、何かの工作教室や実験ショー等を開催し、多くの親子に参加していただいています。

その他にも星空観望会、プラネタリウム星空コンサート、近くの浅川では化石観察会、岩石観察会などを開催しています。

ぜひ、お越しください。

自由な学び―五感を使った観覧者本位の桑都体験

桑都日本遺産センター 八王子博物館　小林 央

桑都日本遺産センター 八王子博物館の使命・役割

文化庁は「地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリー」を「日本遺産」として認定している。東京都で唯一認定された八王子のストーリーは「霊気満山　高尾山～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」。後北条氏とくに八王子城主北条氏照によって興ったまちの営みと、現代にも続く霊山・高尾山への人々の祈りが、この地に育まれた豊かな文化・伝統を未来へと紡いでいく物語となっている。この物語を構成している文化財群の主なテーマは、「高尾山」や「八王子城と北条氏照」、「大久保長安と八王子十五宿」「桑都と織物」「八王子の伝統芸能～祭り・車人形・木遣・獅子舞」などがある。この八王子の歴史的魅力や特色が盛り込まれた「桑都物語」を周知し、観光資源として積極的に国内外へ発信して活用すること、地域の文化財の保存・整備に対する理解を広げること、これらを使命・目的とする桑都日本遺産センター 八王子博物館（以後「はちはく」と略す）は令和３年６月 12 日にオープンした。

お客さま本位の観覧方法～ストーリー什器とモニター

ここ「はちはく」で私たちが力を入れ、取り組んでいることは、「五感を使って展示を楽しんでもらうこと」である。「はちはく」の展示ゾーンに入ると、林立する色鮮やかなイラストが目に飛び込んでくる。これは、展示台一つ一つを取り囲むように設置されているもので、それぞれ 18 の展示テーマの「桑都ものがたり」に関連するイラストが描かれている。これはイラストレーター杉山巧さんが、はちはくのために描き上げた作品で、独特の技法で描かれ、展示場の明るい雰囲気を醸し出している。このストーリー什器のイラスト面には、各展示の内容を連想できる短い文章が書かれている。そのほかに外側から展示資料を覗き込む丸窓も付けられており、子ども目線で内側に展示されている資料を覗き見ることができる。こうした仕掛けにより、展示資料への期待感が生まれるよう工夫されている。

そしていよいよ什器を回り込むと、資料や解説を「見る・読む」ことができる。ここでも観覧者本位の選択と理解ができるよう、解説は意図的に文字を大きくしたもの―これは大胆に展示の概略をまとめた「短文の見出し」になっていて、より詳しい解説は小さな文字で書かれている。これによって大きな文字だけを拾い読みするだけでも、ある程度の解説が完成し、おおまかな理解が可能となる。そのほかいくつかの展示台には、資料を見られる引き出しが内蔵されている。これらの仕組みによって、展示を見るだけでも、観覧者自らが回り込み、覗き込み、引き出したりする動作をおこなえるように作られている。

こうした展示ケースのほかに、３台のタッチパネル式モニターで、移り変わる「高尾山の今昔」や「八王子のまちなみ」といった画像や、自ら画面をスワイプ、ピンチイン・アウトしながら資料画像（八王子宿の絵図など）を楽しむことができる。このように展示をただ「見る」だけではなく、いつの間にか観覧者自らが能動的に楽しむ、そうした動作を誘導する仕組みが施されている。

こうした展示台やモニターは独立し、完結する内容になっているため、どこから観覧しても楽しめるようになっている。多様な観覧者が、それぞれ自分本位の観覧の仕方でそれぞれが体験した「桑都物語」の理解や経験を持ち帰ることができる。

「はちはく」ならではの自由な体験と誘い

駅直結というアクセスの良さからか、以前の郷土資料館展示室（令和３年３月 31 日に閉室）と比べると幼児を連れた家族連れや大学生以下の入館者が増え、明らかに入館者の年齢層は下がっている。入口に投影されているプロジェクションマッピングを繰り返し楽しむ親子や、交流コーナーで車人形や機織りの体験、昔の暮らしの道具やお手玉や折り紙・絵本・双六など昔の遊びが楽しめる「畳の間」で時間を過ごす兄弟姉妹、親子も多い。八王子の関連書籍を備えた閲覧コーナーで読書や学習に取り組む人など、年齢や興味関心・目的が異なる多様な人々が気軽に楽しむことから、充実した知識の獲得、自らが行う体験・経験まで、複数の展示媒体から自由に選び取り、その人なりの学びと体験ができる。これが「はちはく」のイチオシであろうか。そして「はちはく」で楽しんだ後には、市内各所に出かけ、街並みや文化財などを実際に訪れてもらえるような「誘い（いざな）」も「はちはく」の使命として取り組んでいる。こうした取り組みは、日本遺産センターとしての役割を果たすための活動でもあるが、多様な市民との協創を目指す博物館が、先ずはより多くの市民との距離を縮めようという博物館の挑戦と模索でもある。

高尾山の展示什器（外側）

高尾山の展示什器（内側）

体験コーナー

91年館のみどころ・イチオシ

東京都立大学 91 年館（学芸員養成課程展示室）　加藤 早百合・堀 智博

設置の経緯

東京都立大学 91 年館は、本年１月、およそ３年ぶりに開館しました。それに伴って多くの人に、より一層興味を持っていただくためにも、91 年館学芸員養成課程展示室設置の経緯をご紹介したいと思います。91 年館はその名の通り 1991（平成 3）年に建設されました。外観はドーム型で、博物館関連施設としては一見風変わりな（お洒落な？）建物ですが、その理由は、大学と周辺住民の憩いの場となるよう、建設当初にはカフェテリアとして整備されたことに由来します。

その後学芸員養成課程教育の実習を行うことが出来るように、全面改修が行われました。たとえば、採光のための天窓や、調理を行うためのキッチンは、カフェテリアにはなくてはならないものですが、資料保存を第一とする博物館施設としては、太陽光の照射や湿気の発生は絶対に避けなければなりません。そのため、キッチンの撤去・遮光処置を施しました。その他空調・換気設備の見直し、収蔵庫・照明灯の増設など試行錯誤を経て、2012（平成 24）年にリニューアル･オープンしました。

（上）カフェテリア時代・（下）展示室となった現在

こうして生まれ変わった 91 年館ですが、カフェテリア時代と同様（飲食は厳禁ですが）、人々の憩いの場所にしたいと考えております。ぜひ一度足をお運びいただければと思います。

（堀智博）

博物館実習・展示制作と実習成果展示

本学の学芸員養成課程では、「博物館実習Ｉ」という学内実習があります。その授業の締めくくりに、学生たちは展示制作に取り組みます。今年度はその成果を本学の牧野標本館別館 TMU ギャラリーと 91 年館において、学内外の皆様へ公開しました。

本授業の展示制作では、文系理系の２テーマを扱います。今年度は、植物学と民族学を扱った２班に分かれて作業をしました。学生は自らの専攻に関わらず、どちらかのテーマを選びます。植物班はキャンパスにある植物や自然の材料を用いて標本や作品作りに挑み、民族班はケニアの農村で使用された椅子から着想した３つのキーワードから､展示物の収集を行いました。そして､それぞれ立案した展示企画案をもとに､解説キャプションやパネルを作成し、完成した標本、作品および展示物と一緒に展示ケースにおさめたり、掲示したりしました。普段は観覧する立場の展示を実際に制作し、誰かに見せることの難しさであったり、達成感であったり、楽しさなども知ることができたのではないでしょうか。またその成果を公開することは、学生にとってもよい刺激と経験になったのではないかと感じています。

本展示室は、キャンパスのなかでも外れに位置し、学内の者でもなかなか気がつきにくい場所にあります。しかしながらこうして学習の成果を展示・公開することで、学内でも知名度を上げるきっかけになることを期待しています。（加藤早百合）

成果展示に向けて作業中

狛江市立古民家園（むいから民家園）の見どころ

狛江市立古民家園

はじめに

狛江市は、新宿から小田急線で20分ほどの位置にあり、かつては田畑が広がる江戸・東京の近郊農村でしたが、昭和40年代頃から急速に都市化が進み、町の景観は急激に変化し、伝統的な茅葺屋根の古民家も姿を消してきました。

狛江市立古民家園（愛称：むいから民家園）には、急激な都市化のなかで失われてきたかつての景観を構成した2棟の建物が移築・復元されているほか、地域史の一端を記憶するための木造船が展示されています。

旧荒井家住宅主屋について

園内に移築・復元された旧荒井家住宅主屋は、現在の小田急線狛江駅にほど近い旧和泉村に江戸時代後期（18世紀末頃）に建てられた農家建築です。当初は、桁行7間、梁行3間の直屋で、間取りは広間型三間取りでしたが、江戸時代末期頃に、裏手に角屋を増築し（後角）、整形四間取りに改造されました。その後、表側を二間続きの接客空間として整え、明治以降、養蚕に対応するため、床下に炉を設けるなどの改造がなされました。

このように、屋根を含めた建物の形態や間取りの変遷を具体的に辿ることができる貴重な古民家ですが、移築・復元に当たっては建物の機能や時代背景が最も特徴的である江戸時代末期頃の姿に復元しています。

なお、古民家園の愛称となっている「むいから」とは、麦稈（むぎから・むぎわら）のことを指す方言です。狛江は、台地上の畑作が卓越した地域であり、屋根材として、ススキのほかに、小麦の藁などが使われていたことにちなんだものです。

旧髙木家長屋門について

市の北側、旧覚東村の名主家に残されていた長屋門で、棟札から、安政6年に建てられたことが判明しています。また、棟札からは、狛江駅の近くにある泉龍寺の鐘楼門や山門などの建築に関わった地元の大工職人の手で建てられたことが判明しています。市内に残された唯一の長屋門であり、幕末頃の村の大工職人の活躍を知ることができる貴重な建造物です。

園内に展示している木造の屋形船

園内には、長年多摩川で使用されていた長さ11m、幅約2.5mを測る大型の木造船を展示しています。この木造船は、川岸に手漕ぎボートを繋ぎとめ、客がボートに乗り移るための桟橋の役割を果たす台船であり、屋根を架け屋形船としても利用されていました。

かつて狛江と登戸との間には、多摩川に渡しがありましたが、昭和28年に多摩水道橋が完成すると、渡しは廃止されました。ちょうどその頃から高度経済成長期となり、多摩川沿いは、都心から釣りや遊泳に訪れる行楽客で大変賑わうようになり、河川敷には、「川の家」など、行楽客向けの茶屋や貸ボート屋が並ぶようになりました。

この台船は、狛江の貸ボートや「たまりや」の求めに応じて、稲城市東長沼の川船大工、久保井冨蔵氏の手によって、昭和30年代後半に作られた木造の和船です。久保井冨蔵氏は、昭和50年代後半まで、約60年以上にわたり木造の川船を作り続け、多摩川中流域における最後の船大工となりました。比較的水深が浅い多摩川では、底が平らで浅い川船が使われましたが、この台船は、多摩川流域における伝統的な川船の特徴をよく留めています。

実際に多摩川で使用されていた和船としては、現存する唯一のものとみられるとともに、狛江の地が多摩川沿いの行楽地として大変賑わった場所であるという地域史の一端を反映した資料です。

最後に

狛江市立古民家園には、多摩川中流域に位置する狛江の地が、台地上の畑作が卓越した近郊農村地帯から、都心からの行楽地として賑わいを見せた高度経済成長期を経て、現在の住宅都市狛江が形成されてきたという、地域史の一端を留める建造物が移築・復元されていますので、是非、足をお運びいただければと思います。

旧荒井家住宅主屋

旧髙木家長屋門

園内に展示されている屋形船（木造台船）

博学連携の新たな試み

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館　木村 遊

武蔵野ふるさと歴史館では、本年度第２回企画展として「武蔵野地域探究～歴史と環境から考える未来～」／パネル展示「成蹊の歴史と建造物」を、７月23日（土）から９月22日（木）まで開催した。これは、博学連携事業として市内の成蹊中学・高等学校と共催で開催したもので、会期中（開館日数52日間）はおよそ4,800人が企画展に訪れた。本稿では、この企画展の報告を通して当館の博学連携の取り組みを紹介する。

当館では学校教育連携事業として、例年１月から４月まで小学３年生向け（「小学校学習指導要領平成29年度告示」に基づく）の企画展を開催し、主に市立小学校第３学年の児童の見学・体験の受け入れを行っている。その際には、企画展や常設展示の解説のほか、収蔵庫内の見学や石臼挽き体験など、特色あるプログラムを実施している。一方で学習指導要領では、「博物館等の社会教育施設や社会教育団体等の各種団体との連携､地域の教材や学習環境の積極的な活用」（平成29年度告示、中学校、総合的な学習の時間）、「民俗学や考古学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査」（平成29年度告示、中学校、社会科）、「博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したり（中略）、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り，社会との関わりを意識した指導」（平成30年度告示、高等学校、地理歴史）など、小学校のみでなく中学校・高等学校においても博物館との連携や活用が求められている。

そもそも博学連携とは、博物館と学校がそれぞれの教育機能を活かし連携・協力して子どもたちを教育することである。学校の方針や内容に沿って、博物館が学校教育を支援・充実させる実践は全国の博物館で行われている。しかし、学校で行われた教育や、教員・児童・生徒による調査・研究・探究活動を博物館と協働･共有するという連携の事例は多くはない。今回は、こうした博物館からの専門知識の教授や教育支援という一方向性の従来の当館の博学連携とは異なり、新たな博学連携のかたちとして、博物館の資料・施設・人材や研究蓄積と、学校が持つ教育資料、学校と教員の研究蓄積やノウハウ、生徒の探究活動を活かした相互連携を目指して、中高生向けの展示を開催することとした。

本展の展示風景

企画展は、２つのテーマで行った。１つは教員と学芸員とで作成した本展「武蔵野地域探究～歴史と環境から考える未来～」。もう１つは、学芸員が中学生を指導し、その成果をまとめた中学生展示「成蹊の歴史と建造物」とした。

本展では、社会科（歴史）２名、理科（生物・地学）２名の教員による「江戸時代の武蔵野」、「武蔵野研究のあゆみ」、「気象観測でとらえた武蔵野の環境変化」、「武蔵野の自然環境といきもの」というテーマでの展示と、「これからの武蔵野」について観覧者にヒントを与える教員それぞれの思いを綴ったパネルを展示した。展示資料には、当館所蔵古文書や学校で使用している教育用資料（気象観測測器や標本等）、武蔵野市の自治体史を著した旧制成蹊高等学校教員や成蹊大学関係資料を選定した。夏休み期間ということもあり、多くの児童・生徒が来館し、また一般の観覧者からも、アンケートにて温かい意見を頂いた。

中学生展示は、市内でも古く特色のある建造物である成蹊学園本館やトラスコン（旧屋内運動場）、濵家住宅西洋館（旧学生寮・国登録有形文化財）について、成蹊学園の歴史や教育理念、武蔵野市とのかかわりから紹介する内容となった。実際に展示の作成にあたったのは、同年の２月に有志で集まった５名の成蹊中学２年生である。３月から７月までの期間に、学園にかかわる建造物の実地踏査や、所有者・改築時担当者などからの聞き取り、成蹊学園史料館の見学、学校図書館での調査を行い、担当教員と学芸員がこれらの探究活動を指導・支援した。生徒らはこうした探究活動を蓄積し、学芸員指導のもと展示の構成、資料の選定、原稿の執筆、展示作業まで自ら行った。学校と地域の歴史や文化財を学ぶとともに、学芸員という仕事を体験するというキャリア教育にもつながった。

左：当市文化財保護委員稲葉和也氏（建築史家）のアテンドで建造物を見学する様子
右：中学生展示の展示風景

この企画展により、学校の教育実践の普及や生徒の教育支援を行うことができたと同時に、当館で今まで取り上げることのなかったテーマや教育資料を用いた新たな展示を開催することができた。「社会に開かれた教育課程」を実現するために、今後の博学連携の在り方は全国的に複雑化・多様化していくと考えられる。この企画展は当館としても担当学芸員としても、新たな博学連携の在り方への試行錯誤の結晶といえる。今後も、多くの教育機関への支援と協働の実践を通して、「武蔵野ふるさと歴史館の博学連携」を確立していきたい。

学生・教員と協働した展覧会 ―公衆衛生から鉄道・メタバースまで―

帝京大学総合博物館　甲田 篤郎

帝京大学総合博物館（以下本館）は帝京大学八王子キャンパス内に設置された博物館です。その設置目的にある「本学の教育・研究活動と連携し、総合的・学術的な活動を行い、その向上を図るとともに、それに必要な、歴史、芸術文化、自然等の資料を収集・保管する。併せて教育・研究活動の成果の公開や、他機関との連携を通じて、大学の社会貢献を推進すること」を実現するため、継続するコロナ禍で博物館活動が制限されるなかでも、教職員・学生との協働のもと試行錯誤をしながら館運営に取り組んだ 2022 年度を振り返ります。

■教育・研究活動の成果を社会へ還元

大学の運営には多くの公的資金が投入されており、そこで行われている教育・研究活動の成果を社会に広く還元することは、本館の社会的役割の１つです。学芸員３名に対し、学部生 22,542 名・大学院生 440 名・専任教員 1,265 名（2022 年５月１日現在）が所属する大学組織において、多くの専門的な教育・研究成果を公開していくために、学生・教員との協働は不可欠であり、そうした展覧会や講座は本館の見どころです。2022 年度は、本館主催の２件の企画展と、学生・教員主催の 11 件の展覧会を実施しました。連携した教員の所属も、公衆衛生学研究科・日本文化学科・史学科・社会学科・経済学科・国際経済学科・経営学科・初等教育学科・外国語学科・文化財研究所と多岐にわたります。本稿においては、その一部を紹介します。

■ザ・公衆衛生！－社会と個人の健康を守る黒衣たち－（2022 年 10 月 7 日～ 2023 年 2 月 25 日）

本学は国内の私立大学として初めて公衆衛生の専門職大学院を 2011 年に設立しました。公衆衛生は私たちの暮らしに非常に身近であり、人々が健康により豊かで安全に安心して生活を送るうえで大変重要です。新型コロナウイルス感染症をはじめとした感染症対策の場面だけでなく、人々の暮らす生活空間や、日々の健康管理、ワクチンや薬など幅広く私たちの生活を縁の下から支えています。教員・学生が人々のより良い暮らしの実現に向け、研究・実践を重ねた成果から、感染症対策のみにとどまらない社会と個人の健康を守る「黒衣」としての公衆衛生の多様性を紹介する展覧会です。

■生誕 130 周年 多摩愛の近代画家・小島善太郎－芸術が与えた人生×自然に反映する人格－（2022 年５月 28 日～７月 30 日）

岡部昌幸（史学科教授）ゼミ主催で、本学と日野市の地域連携による地域文化の顕彰と普及を目的とした展覧会です。生誕 130 周年を迎えた小島善太郎が、日本の芸術界に新風を巻き起こしたその生涯を、日野市立小島善太郎記念館の協力の元、新発見を含む絵画や素描約 40 点で追い、さらに彼自身の絵を描く源であるノートやパレット等も合わせて紹介しました。

■帝京てっけんと多摩地域の鉄道 42 年のあゆみ（2022 年６月４日～７月 30 日）

帝京大学鉄道研究部主催で、1980 年の創部から収集してきた鉄道備品や部員が撮影した鉄道写真・動画、鉄道模型、車両貸切イベントにて作成したヘッドマークから、多摩地域の鉄道の歴史と同部の歩みを紹介する展覧会です。

■せとうち西国街道展－産学官連携プロジェクト展示－（2022 年 10 月 15 日～ 11 月 12 日）

吉岡孝昭（国際経済学科教授）ゼミ主催で、西国街道の過去・現在・未来を切り口に、リアル展示（本館）とバーチャル展示（バーチャル会場総監督：(株)SYSTEM JOURNEY）の融合を目指しました。「地方から東京へ、そして世界へ」をテーマに 産学官連携による幅広い「知」の集積としての 西国街道の魅力を、デジタル技術（メタバース・3D・VR・AR・Web 等）を通じ、フランスのトゥーロン大学・フランス国立工芸院とも連携し国内外へ発信しました。

開館 40 年、ただいま「博物館力」増強中!

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館　具嶋 恵

当館は大学の一施設であると同時に、1982 年の設立以来、広く一般にも公開しており、毎年 3 回の特別展と公開講座を開催してきました。

2020 年度、2021 年度とコロナ対策により一般開館を控えておりましたが、2022 年 4 月から、日時限定ながら再開館しています。9 月以降、開館日を週 3 日（毎週火・水・木曜）にしたところ、コロナ前よりもむしろ開館日 1 日あたりの入館者は増える結果となりました。ウェブサイトからの事前予約システムも順調に機能しており、安心してゆっくりご来館・ご見学いただく体制が整いつつあります。

試行錯誤のこの 3 年で期せずして身に付いたオンラインでの発信力を駆使するとともに、開館以来 40 年の間に充実させてきた収蔵品をもとに魅力的な企画を打ち出し、地域の方にも利便性の良い施設を目指してまいります。

推しポイント❶　多彩な収蔵品をもとにした特別展

湯浅八郎旧蔵品を筆頭に、陶磁器、染織、木工、紙工、金工、漆工、郷土玩具など、民藝や工芸の多種多様な収蔵品を管理しています。その中から、コロナ禍を反映し、2020 年度には「疫病退散」、2021 年度には「旅」をテーマとしたコレクション展を開催しました（一部、学内限定公開）。

2022 年度は特別展「バンクス植物図譜」と「日本のうるし工芸」を企画。いずれもすべて本学あるいは当館の所蔵品で構成した展示です。2023 年度は、湯浅八郎講義録『民芸の心〔新装和英版〕』復刊と同時開催の「湯浅八郎・民芸の心」、「型紙精美なる技」などを予定。学外学内の方とも無料でご覧いただけます（しばらくの間、要事前予約）。

「旅」をテーマとしたコレクション展会場

推しポイント❷　公開講座はオンラインで継続

特別展にあわせて専門の講師をお招きする公開講座は、対面での実施を見送り、完全オンラインに移行しています。当初はインターネットに抵抗のある方が離れてしまうことを危惧しましたが、ウェビナーの視聴方法を添えて丁寧にご案内した結果、毎回 100 ～ 150 人と参加者は増加傾向にあり、海外を含む遠方からも参加できるとあって、常連の方だけでなく新たな受講者が増えたのは、期待以上のことでした。内容に関しても、小中学生にも分かりやすいレクチャーから、博物館専門員の要求にも応えるようなものまで、幅広い対象に向けたプログラムを用意しています。以下は最近の演題です。

2022 年 1 月 29 日（土）第 114 回公開講座「奇妙な世界を巡る　幕末日本が生み出した絵双六」講演者：ロバート・エスキルドセン（当館館長）

2022 年 5 月 21 日（土）第 115 回公開講座「持続可能な博物館活動のための保存環境の整え方」講演者：佐野千絵氏（東京文化財研究所名誉研究員）

2022 年 10 月 1 日（土）第 116 回公開講座「植物の不思議」講演者：多田多恵子氏（植物生態学者）

2022 年 11 月 5 日（土）ICU ×松阪市 包括連携協定締結記念講演会「一畳敷と松浦武四郎」講演者：山本命氏（松浦武四郎記念館館長）

2023 年 1 月 28 日（土）第 117 回公開講座「漆器のたのしみ」講演者：永島明子氏（京都国立博物館学芸部教育室長）

カジュアルな「ランチタイムトーク」の企画も好評

推しポイント❸　学芸員課程の授業成果とコラボ

大学博物館として、学芸員養成課程をはじめとする授業とコラボレーションし、学芸員が講師を兼任、収蔵資料や博物館関係者のネットワークを提供して学生の学びを深めています。最近は授業のフィードバックを受けて、完成度の高い成果物は積極的に展示や広報に活用しています。展示の音声ガイドや特設ウェブサイト、活動紹介動画、SNS での情報発信等で、学生制作のコンテンツが活躍中です。

学生による音声ガイドを活用

また、学内で当館が中心となり保全活動をしている国の登録有形文化財「泰山荘」の VR 公開、収蔵品の土偶の 3D モデル化といった、最新の情報技術を取り入れた試みもおこなっています。今後も活用の幅を広げ多くの来館者に楽しんでいただけるような企画を打ち出していきたいと考えています。ご期待ください。

日獣大獣医学教育用掛図コレクションのご紹介

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム　石井 奈穂美

掛図とは

大判の絵図や表を掛け軸のように仕立てた視覚教材のことを「教育用掛図」と言い、日本では明治期に学校教育の広がりとともに普及しました。現在でも新たな掛図の製造・販売は続いており、小学校教育などで活用され続けていますが、教材として繰り返し使用するうちに劣化してしまった掛図は廃棄されることが多く、初期に作られた掛図の中で現存するものはわずかです。

日獣大獣医学教育用掛図コレクションの概要

「日獣大獣医学教育用掛図コレクション」は、本学の獣医解剖学教室から譲り受けた掛図 120 点およびポスター２点で構成されています。コレクションの中には、近代の日本における家畜解剖学の基礎を確立した田中宏（東京帝国大学家畜解剖学講座 初代教授）の落款が残っているものが 16 点、田中宏とその門下生である大澤竹次郎の連名の落款が押されたものが９点含まれています。大澤は本学の前身校である日本獣医畜産専門学校にて教授を務めた経歴を持つ人物でもあります。これらの掛図は、大澤の弟子であり本学の獣医解剖学教室で教鞭を取っていた醍醐正之に引き継がれ、授業で使われなくなってからも本学にて保管され続けてきました。

この他にも、コレクションには本学の前身校である私立日本獣医学校と日本高等獣医学校の関係者や卒業生が、1917 年から 1921 年にかけて作成したことが読み取れる掛図が 22 点含まれています。当時の卒業アルバムには、これらの掛図を用いた授業の様子を撮影した写真も残されています。

残念ながら、当館に移管される前の段階で、保存状態の悪い一部の掛図は廃棄されてしまったそうですが、当館が所蔵する掛図のコレクションは、田中・大澤と続く日本の獣医解剖学の系譜と本学の繋がりを示すと同時に、本学における獣医学教育の歴史を示す貴重な資料であると言えます。

掛図を用いた授業の様子 [1]

掛図の状態調査と修復

コレクションに含まれる掛図は、当館に移管された時点で表装の破損や乾燥によるひび割れが確認されており、中身の確認のために無理に広げると劣化がさらに進行する可能性がありました。そのため、2019 年度に紙資料の扱いに長けた専門業者に掛図の調査を依頼し、採寸・写真撮影・材料と画材の把握・損傷劣化状態のチェックを行いました。

この調査の結果、全掛図中 47 点は取り扱いに注意が必要なほど劣化が進行していることが判明しました。そこで当館では、2020 年度から 2021 年度にかけて本学の歴史と関わりの深い掛図５点の修復を行いました。この修復では、５点中１点は本来の姿を再現するため修復後に再度軸装を施し、残りの４点は今後の活用や保管を考慮して本紙のみの形に変更しました。

掛図コレクションの今後

2020 年度から 2021 年度にかけて行った修復により、掛図の状態が改善され、掛図に残った細かな書き込みも確認できるようになりました。今後は、残りの掛図の修復を継続して行うだけでなく、コレクション全体をデジタル化しネット上で公開することも検討しています。

また、2022 年９月には、解体予定の校舎の一室から 22 点の掛図が新たに発見されました。コレクションの掛図に比べて小型で、表装に書かれている情報も異なることから、コレクションの掛図とは異なる来歴を持つ可能性があります。残念ながら保存状態が悪く、全体にカビが発生しているため、カビの処置を行った上でさらなる調査を行う予定です。

掛図に関する企画展のご案内

これまでに修復を行った掛図５点を展示する企画展を開催しています。興味のある方はぜひご来館ください。

［企画展名］2022 年度企画展 獣医学教育用掛図展
～獣医解剖学の系譜と本学の教育～
［期間］2022 年 10 月２日～ 2023 年５月 31 日（予定）
［開館時間］10：30 ～ 17：00
［休館日］日・月・祝日、年末年始、大学の定める休日
（その他臨時休館あり）
［入場料］無料
［会場］日本獣医生命科学大学
付属ワイルドライフ・ミュージアム 企画展示室

※ 都合により会期が変更となる場合があります
※ 見学には、当館ウェブサイト内の来館案内ページより事前のご予約が必要です
※ 詳細情報は当館ウェブサイトをご参照ください

企画展の様子

当館ウェブサイト

（[1] 私立日本獣医学校 第９期生卒業アルバムより引用）

小平市鈴木遺跡資料館のみどころ・イチオシ

小平市鈴木遺跡資料館　髙田 賢治

はじめに

小平市鈴木遺跡資料館は、日本を代表する旧石器時代遺跡の一つである、鈴木遺跡から出土した遺物を展示しています。

鈴木遺跡は武蔵野台地のほぼ中央から流れ出す、石神井川源流域の谷頭部の周囲に営まれた旧石器時代の集落跡で、日本の後期旧石器時代の初めから終わりまで、ほぼ途切れることなく旧石器が出土する、旧石器時代としては極めて稀有な遺跡です。そのため南関東の旧石器時代の石器変遷が明らかになり、旧石器時代遺跡の年代的な位置づけを決めるタイムスケール（武蔵野編年）となったことでも知られる遺跡です。以下、展示の見どころをご紹介します。

展示見どころ①：鈴木遺跡出土の旧石器からみた後期旧石器時代初頭から終末までの石器変遷

鈴木遺跡から出土した石器は、各時期ごとにその形と組み合わせから年代順に12ものグループのまとまり（文化層）が確認できました。そうした考古学的な成果から拠点的集落として評価され、令和３年３月26日には国の史跡に指定されました。展示では、12の文化層について特徴的な石器を中心に、古い方から新しい方へ順に並べています。これを時系列順に見ることで、鈴木遺跡からみた旧石器時代の石器変遷を追うことができます。

鈴木遺跡から出土した各 12 文化層の年代順展示風景

展示見どころ②：旧石器時代遺構の大型標本

また本館は、遺跡に関わる大型標本資料も豊富です。

鈴木遺跡の発掘調査では、現場で石器や礫群が出土した状況を石膏等で型取りしていて、その一部を展示しています。これを見れば、旧石器時代の生活の痕跡が発掘調査でどのように出土するかがわかります。また、地層剥ぎ取り標本も展示されており、旧石器時代～現代までの地層を実物大で見ることができます。

展示見どころ③：鈴木遺跡から出土した黒曜石

鈴木遺跡は周辺の旧石器時代遺跡と比較して、黒曜石の出土割合が高いのも特徴です。

鈴木遺跡の国史跡指定にあたり、これまで行われた発掘調査成果の再整理を行いました。その際、出土した黒曜石について蛍光Ｘ線分析により産地推定を行いました。その結果、鈴木遺跡で使用された黒曜石石器石材の産地は、大きく①八ヶ岳山麓、②伊豆・箱根、③伊豆諸島神津島、④那須山地高原山の４地域と推定されました。展示では、出土した黒曜石製の石器を推定産地ごとにまとめて展示し、それぞれの産地の黒曜石の石質の違いが一目でわかるようにしました。

また、各文化層ごとに出土した黒曜石の産地を出土分布図に示し、どの産地の黒曜石が遺跡内のどこで使用されていたかを追えるようにしました。これをみれば、鈴木遺跡範囲内での産地分布が均等ではなく、偏りが見られることがわかります。この状況は、たとえばそれぞれ別々の集団が遺跡範囲内で同時期には生活領域を分けていた可能性が考えらます。現在このような分析が行われた例はほとんどありません。しかし、本展示では黒曜石の産地分布からみる旧石器人の生活領域のあり方についてこうした最新の研究成果を窺うことができます。

展示見どころ④：縄文時代以降の鈴木遺跡

鈴木遺跡では旧石器時代以後、遺物・遺構の検出量は減少し居住の痕跡は見られなくなります。縄文時代の竪穴住居は検出されず、狩猟のための陥穴と、早期から中期ごろのものを中心とする縄文土器の破片がいくつか見つかっているだけになります。その理由は、旧石器時代には水流を形成していたと考えられる湧き水が、縄文時代以降は水量が減少し、消滅してしまったためと考えられます。資料館では、検出された陥穴のＦＲＰによる４分の１をカットした型取標本が展示され、陥穴の実際の大きさと形状を実感することができます。

その後の時代もしばらくは人間活動が見られませんが、平安時代になると遺跡の北東部で竪穴住居が１軒だけ検出されています。この住居後からは、甑（こしき）と呼ばれる穀物を蒸すために使用された土師器が出土しています。周辺にはほかに住居がみつかっていないことから、平安時代に集落があったのではなく、作業小屋等のような一時滞在施設だったのではないかと想定されています。資料館ではこの土器の複製品を展示しています。

江戸時代になると、玉川上水から分水が引かれ、旧石神井川の谷地形を利用して水田が営まれたり、水車が設置されたりしました。ここの水車は谷の高低差から生まれる速い水流により出力が高かったことから、穀物の製粉だけでなく、幕末には火薬の原料となる硝石等の粉砕にも使用されたことがありました。資料館では鈴木遺跡の発見にも繋がった、分水の水路跡の紹介や、水車跡付近から出土した石臼の破片を展示しています。

おわりに

鈴木遺跡資料館では、主に国史跡に指定された鈴木遺跡出土の旧石器を主に展示し、そこから見える後期旧石器時代を中心に紹介しています。しかしそれだけではなく、旧石器時代以後の歴史についても展示で触れ、鈴木遺跡から見える旧石器時代から現代へと繋がる地域の営みを紹介しています。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺・西武園線「東村山駅」西口下車徒歩８分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線･JR 南武線「分倍河原駅」から京王バス「郷土の森総合体育館」行き､｢郷土の森正門前」下車すぐ
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田 4-16-17	042-739-3420	小田急線「町田駅」東口から徒歩 12 分／ JR 横浜線「町田駅」ターミナル口から徒歩８分
町田市立自由民権資料館	町田市野津田町 897	042-734-4508	小田急線・JR 横浜線「町田駅」から町田バスセンター 11 番乗り場発「藤の台団地」「鶴川団地」「鶴川駅」行きバス「市立博物館前」下車徒歩７分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 15 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩４分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字駒形富士山316-5	042-568-0634	JR 八高線「箱根ケ崎駅」下車徒 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原５	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口から徒歩７分
武蔵村山市立歴史民俗資料館 **武蔵村山市立歴史民俗資料館分館**	武蔵村山市本町 5-21-1 武蔵村山市大南 3-5-7	042-560-6620 042-566-3977	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス「かたくりの湯」下車徒歩１分 分館：西武拝島線・多摩モノレール「玉川上水駅」から武蔵村山市内循環バス「大南三丁目」下車徒歩３分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920-1	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口から徒歩 20 分／ JR 青梅線「羽村駅」東口からコミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口から徒歩 10 分／西武池袋線「清瀬駅」北口バス乗り場１番から西武バス「郷土博物館入口」下車徒歩１分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から新道福島行き・富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩５分／ JR 中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩５分／ JR 青梅線「西立川駅」下車徒歩 20 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から藤倉行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	多摩モノレール・京王線「高幡不動駅」から百草団地方面バス「高幡台団地」下車徒歩５分／多摩モノレール「程久保」下車徒歩７分
日野市新選組のふるさと歴史館	日野市神明 4-16-1	042-583-5100	JR 中央線「日野駅」から京王バス高幡不動駅行き「日野七小入口」下車徒歩５分　／京王線･多摩都市モノレール「高幡不動駅」から京王バス日野駅行き「日野七小入口」下車徒歩５分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口ココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車　徒歩５分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 10 分、JR 中央線「国立駅」からバス「国立操車場」行または「国立泉団地」行き「くにたち郷土文化館」下車すぐ
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」または都営バス「青梅車庫」行きで「八幡神社前」下車徒歩２分
パルテノン多摩	多摩市鶴牧 1-24-1-501	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩５分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口から徒歩９分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口バス２番３番停留所からバス「小金井公園西口」下車徒歩５分／西武新宿線「花小金井駅」南口より徒歩５分「南花小金井」(小金井街道沿い) 停留所から「武蔵小金井駅」行きバス「小金井公園西口」下車徒歩５分
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	たましん歴史・美術館：JR 中央線「国立駅」南口前／たましん美術館：JR 中央線「立川駅」北口より徒歩約６分
東京都立埋蔵文化財調査センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩５～７分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口から徒歩 18 分／西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」からはなバス第４北ルート「多摩六都科学館」下車すぐ
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から西武バス「久米川駅北口行」で約10分／西武新宿線「久米川駅」北口から西武バス「清瀬駅南口行」で約20分（いずれも「ハンセン病資料館」で下車）
コニカミノルタ サイエンスドーム **（八王子市こども科学館）**	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩２分
桑都日本遺産センター **八王子博物館**	八王子市子安町 4-7-1 (サザンスカイタワー八王子３F)	042-622-8939	JR 中央線「八王子駅」南口から駅直結／京王線「京王八王子駅」から徒歩８分
東京都立大学 91 年館	八王子市南大沢 1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約５分
狛江市立古民家園 **（むいから民家園）**	狛江市元泉 2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」「和泉多摩川駅」から徒歩 10 分／小田急線「狛江駅」北口から「多摩川住宅」行きバスまたは「こまバス」（北回り）で「児童公園」バス停前
武蔵野市立 **武蔵野ふるさと歴史館**	武蔵野市境 5-15-5	0422-53-1811	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」から徒歩 12 分／ JR 中央線「武蔵境駅」北口からムーバス境西循環に乗車し、４番「武蔵野ふるさと歴史館」下車すぐ
帝京大学総合博物館	八王子市大塚 359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩 15 分／京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」「高幡不動駅」「多摩センター駅」から京王バス「帝京大学構内」行きに乗車し終点にて下車
国際基督教大学博物館 **湯浅八郎記念館**	三鷹市大沢 3-10-2	0422-33-3340	JR 中央線「三鷹駅」南口または「武蔵境駅」南口から小田急バス「国際基督教大学」行きにて終点下車／武蔵境駅からタクシーで 10 分
日本獣医生命科学大学付属 **ワイルドライフ・ミュージアム**	武蔵野市境南町 171	0422-31-4151	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口から徒歩２分
小平市鈴木遺跡資料館	小平市鈴木町 1-487-1	042-323-2233	西武新宿線「小平駅」南口から西武バス武蔵小金井駅行き、もしくは JR 中央線「武蔵小金井駅」から西武バス小平駅南口行き「回田本通り」下車徒歩５分／西武新宿線「花小金井駅」から立川バス「国分寺駅北口」行き「共済住宅」下車徒歩10分

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩　№44

発 行 日　2023年3月31日

発　　行　東京都三多摩公立博物館協議会
2022年度会長　清瀬市郷土博物館
清瀬市上清戸二丁目6番41号
042-493-8585

編集委員　コニカミノルタサイエンスドーム八王子市こども科学館
森　融
桑都日本遺産センター八王子博物館
中村　明美
東京都立大学91年館　堀智博・加藤早百合
多摩六都科学館　原　朋子
国立ハンセン病資料館　及川由紀子